

他を欺かざるを信するなり。世に愛てふもの存在せば、彼は確かに其の權化なり。世に純愛の世界あらば、彼は確かに其の代表者なり。彼の愛に接すれば、枯骨に肉つき、精氣生ず、實に奇しき慈愛かな。之を父なる神の慈愛に歸す、信すべき話にあらずや。

斯くばかり、神が慈愛深きは、我等の父なればなり。耶蘇は吾等に祈禱を教ふるに當り、先づ神に向つて、天に在し、ます吾等の父よ（馬太傳六の九）と呼ばしむ。此の語の中に對神關係即ち宗教と、對人關係即ち道德とは盡されたり。神は父、人類は兄弟、而して世界は實に一大家庭なり。義務と責任とは自ら語中に定まれり。安心、平和、亦語中に含まる。父の觀念は思想の斷片にあらず、基礎となり中心となりて、一の體系を組織するなり。凡そ人事百般のこと、之を以て解釋せられざるは無し。此の語は言ふまでもなく、人類の家庭内に於ける用語に出でたり。語としては、人の父

子關係は主にして、神を父と呼ぶは唯比喩的に人生の用語を假用せるに過ぎず。而かも意義としては、神人關係は絶對的基礎にして、人類の父子關係は僅に其の一端を現はせるに過ぎず。而して其の現はすや極めて不完全なるを免れざるなり。爾等の中、誰か其の子麵包を求めんに石を與へんや、また魚を求めんに蛇を與へんや、さらば爾等惡しき者ながら善き賜を其の子に與ふるを知る。況して天に在す爾等の父は、求むる者に善き物を與へざらんや。馬太傳七の九「見るべし、耶蘇が信仰に従へば、神の父たるは完全なれども、人の父たるは極めて不完全なるを。人には弱點多ければ、従つて父子關係とても理想を隔つること遠く、互に不完全なるを免れず。爾曹惡しき者ながら」と示されたる如く、短所は多かれど、尙ほ眞の父の慈愛の一端を現はして、善き賜を其の子に與ふるを知るなり。用語は人より出でたれども、愛の標準は耶蘇が感得せる神

にあり、彼のみが絶對的愛者なり。

(四)血と肉との證明。耶蘇の教説は、學者の如く博覽強記を特長となさず、巧妙機智を誇らざるなり。而かも語少くして力あり、見しが儘聞きしが儘を告ぐる如き確信ありき。茲に幽玄にして難解の一大書籍あり、之を解することは人生の幸福に結果するとせよ。豫言者の系統に屬するものは直覺的に之を説き、哲學者は論理的に之を探究せんとす。而かも説いて盡さず、究めて達せざるの憾みあるを免れず。然るに、耶蘇が之を説くや、簡にして要を得たり。彼の言ふ所に依れば、彼は其の書の著者にてありたるなり。少くとも著者の意を其の儘語れるなり。我を見し者は父を見しなり、何ぞ我に父を現はせといふや。我れ父に居り、父の我に居るを信せざるか。我爾等に語りしことは自ら語りしに非ず、我に居る父其の業を爲せるなり。(約翰傳十四の九)神を以て其の書籍の著者と

せば、耶蘇は或る意味にて自ら著者たり、或る意味にては完全なる説明者たりしなり。古往今來未だ曾て耶蘇の如き神の啓示者はあらず。面倒なる議論を用ひずして、彼を受け、己が教主と仰ぐ者は幸なるかな。

我等が父の慈愛と正義、及び我等の救拯に關して證明せんが爲に、耶蘇は世に生れたりき。彼の教訓と行爲とは、總て其等の證明ならぬは無きも、別きて貴きは十字架上に流せる血と裂ける肉との奥印なりき。固より彼が慘殺さるゝに至るに就いては、複雑なる諸種の事情あり、地上の王國を待望せる民衆の革命運動に荷擔せず、此の世に超然として靈の王國を主張せるにも由るべし。當時勢力を専らにせる宗教家等の嫉妬も亦關係せしならむ。磔刑の近因如何と見るに、耶蘇が神を父と呼び己と神を等しうせることが、猶太人をして褻瀆罪に問はしめたるなれど、當時の主權者たる羅馬の法律上有罪となり兼ねたるを以て、羅馬總

督の面前に於ては、猶太人の王、即ち羅馬に對する反逆者として訴へられたるなり。罪狀に記されたるは、猶太人の王なりき。而して神の子及び王の二者ともに、實際耶蘇が主張せる所にて、全然虚構の言にはあらず。虚構の言にあらずと雖も、其の意義は大に誤られたりき。耶蘇が此の世の國にあらざる永久靈界の建設者たればとて、羅馬の政治の破壊者にあらざるは、火を賭るよりも明かなれども、靈界の消息を解せぬ人に取ては、靈界と物質界とを混同さるゝこと、古今一轍なり。耶蘇が臣者の如く黙して答へざりしは、到底眞意を解せしめ難きを知りたればならむか。

表面及び裏面の事情は如何にともあれ、耶蘇の意識を想へば、彼は餘儀なくせられて死したるにあらず、總ての人に代りて生命を棄つる覺悟ありき。曾てはモウセ曠野に於て毒蛇に惱める民等を憐れみ、眞鍮製

の蛇を竿上に擧げ、そを仰ぎ見る者をして無難ならしめたり。其の如く耶蘇も亦信する者に、亡ぶることなくして永生を與へんために、十字架に擧げらるべかりしなり。(約翰傳三の十四) 彼は犠牲の外に救拯的愛を發見せざりき。一粒の麥、己が生命を惜しみ死すること無くむば、何時までも一粒にて終りたりけむも、地に落ちて自ら死せむか、遂には多くの果を結ぶべしと、教へたる彼は、一粒の種麥を以て自ら任じたりしなり。結果の如何は兎も角、彼の死が萬人の救ひとなるべきを彼自ら信じたるは争ふべからざる事實なりとす。吾等は淺き經驗に訴へて、彼の確信の眞なりしを知る。神が吾等の父たること、及び慈父の愛もて吾等を救ひ、本來の位置、即ち神子の位置に復し給ふことは、耶蘇の血と肉とに由り、證明されて餘りありと謂ふべきか。

### 三 基督者に於ける啓示

萬國に通じ萬代に亙り、神は吾等人類一人々々の父たること、耶蘇に由りて現はされたり。彼に於て吾等は已に最高啓示を得たれば、之を受け之を信じ、我が有となさば、則ち足りぬべし。敢て他に求むるの要なきなり。然れども耶蘇を信じたる弟子等の信仰が、極めて幼稚なる程度より、月を経年を逐ひ一步々々耶蘇に近づきたる様を觀れば、吾等が経過すべき徑路を示せるやに思はる。乃ち梗概を記して参考に資せんとする所以なり。

(一)依然として國民の守護神。道を聽き理を解するは敢て難きにあらざれども、主となりて我を支配せる先入を去り、殆ど性を成せる舊習を打破するは容易のことに非ず。新説に推服するも、初の程は自己流に解釋するの常なれば、我は依然として舊態を更めざるなり。されば耶蘇の弟子等は、三箇年に亙る星霜を主と共に送り、神が人類の慈父たるこ

とを、或は懇篤なる言語にて、或は窮まりなき愛の行爲もて、教へられながらも、覺る所甚だ淺かりき。耶蘇の死と復活とに關しても、幾度か豫告されたれども、弟子等は全然之を忘却せるか、或は自己流の解釋を下して満足したりしなり。或る時の事なりき、耶蘇が己の死が目睫の間に迫れるを豫告せるに、之を聽き居たるヨハネ、ヤコブの兄弟は、耶蘇の前に進み出で、爾榮光を得ん時、吾等の一人を右に、一人を左に坐せしめよと請ひぬ。耶蘇の死と共に多年待望せる王國成り、耶蘇自ら榮光の體と變り、國王の位に即くべしと解したるにはあらざるか。何は兎もあれ、弟子等は誤解し居たりしなり。思ひがけもなく、耶蘇が敵手に捕へられ、極刑の罪人として十字架上に慘殺せられ、而して彼等が待望せる地上の王國は建設せらるゝに至らず。不意の大打撃に希望の光は消え失せ、前途暗澹咫尺を辨せず。多數者はエルサレムを逃れてガリラヤの故山に歸

りぬ。少数者は尙ほ途中にあり、或は逃れ支度に忙はしき日をエルサレムに送りたりき。

時に意外なる報道、彼等の間に傳へられたり、耶蘇の肉體は朽ちず、彼は復活して、何某に現はれぬと。或は之を信じ、或は之を疑ひしが、日經つまゝに自ら直接に復活の主を拜するに及びて、信せざる者無きに至れり。靈化せられたる耶蘇が弟子等と共にあり、との信仰に、彼等の元氣は復活せり。而して政治宗教の中心なるエルサレム指して馳せ登りぬ。此地は數日以前に彼等の主を慘殺せる地なり。行政長官たる羅馬總督、起訴人たりし宗敵なる祭司等、さては教唆せられて、十字架に付けよ、十字架に付けよと叫びたる無恥の群衆は、こゝにあるなり。而かも怯めず、臆せず、公然と此の大都に集合したる弟子等の勇ましかりしことかな。

復活を迷妄となし、之に反對する者あり、或は反對せざるまでも、體の

よき解釋を下して満足せるものあり、或は議論をもて證明し、人をして信せしめんとするもあり、然れども、好みて疑はんとする者は到底信じ能はざるべし、論證するとも何の甲斐あらむや、是れ實に宗教的實驗を基礎とするものにて、論理上の問題にあらざるなり。耶蘇の弟子の一人なるトマスは、同門の親友等の證言をすら疑ひたるにあらすや、而かも一たび靈眼開かれ、目のあたり復活の主を拜してより、懷疑の雲は一掃せられ、我神我主と信するに至れり。之を見るも、信仰的實驗に由りて耶蘇の復活を信するの難きは知らる。

復活せる耶蘇を信じ、勇氣日頃に百倍し、エルサレムに集合したる者百二十人、心を協せて祈禱を一室に凝らすこと數十日、靈火漸く燃えて心熱し、耶蘇死して約五十日目、ペンテコスタの祭日に至りて、種々なる奇現象を見るに至りぬ。是に於て弟子等は、起ちて各、演説を始めたり、今

使徒行傳に由りて傳へられたるペテロの代表的演説を見るに、彼等が極力證言せるは、耶蘇の復活なりき。一旦成立の緒に就きながら、首領の死に由りて一敗地に塗れたる神の國を挽回するには、首領の復活を主張するに勝るもの無かりしなり。然れども、彼等が主張せる神の國は、耶蘇のそれと大に方角を異にせり。彼等の「王國」は、一般民衆が渴望せるものに外ならず、即ち地上王國なりしなり。耶蘇を以て地上王國の建設者にして其の王たる基督となせるなり。彼等が民衆に迫りたる「改悔」は、今日我等が主張する如き靈的のものにあらずりき。新王國の王たる耶蘇を殺し、罪を悔い、其の王國民が特に受くべき福利に脱はなれなといふに過ぎざりしなり。其の説に服して洗禮を受けたるもの三千人、是等は皆猶太王國の恢復を熱望せる愛國者なりき。

耶蘇は復活して昇天せり、聽て彼は再臨せむ、而して赫々たる榮光の

中に現はれて異邦人を逐ひ、ダビデ、ソロモンの昔時に勝り、繁榮を世界に誇るに足るほどなる王國直ちに建設せらるべしとは、多數弟子等が信じたる所にして、最後の結果は時俗の待望せる所と一致せり。是を以て耶蘇の復活を信せしめ、再來を説き、新王國の王者基督は彼なりとだに主張すれば、民衆の信仰を得ること難からざりしなり。而かも彼等の信仰は誤れり。神の國が地上の王國なりせば、彼等の神は依然として一國民の守護神たる舊態を改めず、憐むべき宗教なりき。耶蘇に聽き、彼を受けたりとて、長き先入の脱し難きは昔も今も變らざるなり。されば彼等は眞面目に信じたり。生命に斯かる迫害を受けながら、毫も怯ひむことなく、却つて主の爲に苦しめらるゝを喜びたり。斯かりければ誤解謬信は年と共に漸次改まり、永久不變の靈的信仰に進みぬ。恰も是れ、尊王攘夷を熱心に主張せる維新當時の愛國者が、世の變遷に伴ひて開港論者

と進みしが如し。信する所に眞面目をだに缺がすむば、遂には必ず眞の信仰に達すべきなり。

(二) 耶蘇の父。最初の基督者は、日常生活は元より、宗教上の儀式慣例などすら、一に舊習を襲ひたりき。古き革囊に新酒を容れ、洋服に下駄穿ちたらんが如かりしとや謂はむか。彼等はエルサレムの神殿に詣で、供物を捧げ、嚴重に律法を守りたりき。外觀のみならず、彼等の意識せる所も、恐らく在來のパリサイ宗派以外にはあらざりしなり。彼等はパリサイ人中最も嚴肅なるパリサイ人なりき。而かも彼等には唯一特種なるものありき。そを何ぞといふに、耶蘇なる一人格を、誤りながらも信じたること、是れなり。耶蘇の生命と連結せるは、實に彼等の特色なりき。初めの程は、在來の宗派に屬しながら、何等の矛盾なく耶蘇を信じたるらしきも、此の高き生命に觸れたる者が、何時までか地上に踟躕すべきぞ。遂

に膨脹せでは已まざる酵<sup>はんた</sup>を藏しながら、何時までか外面に現はれで  
あるべきぞ。彼等自ら其の新生命を意識せざる中に、慧眼なるパウロ(後  
にパウロ)は、敏くも之を見出し、雙葉の中に根絶するに若かずとなし、ス  
テパノを殺し、多數者を捕縛し、遠くダマスコに旅し、逮捕して基督者を  
盡さんとせり。パウロが基督者に對するや、外教としてにあらで、異端(宗  
内に於ける危険分子を異端といふなり)としてなりき。

使徒行傳第七章に記されたるステパノの演説を讀むに、彼はパリサイ宗を隔つること甚だ遠からざりき。彼は在來の律法を信じ、豫言を重んじたり、而して之を楯として耶蘇を殺したる國人の罪を責む。其の時に異なる所は、耶蘇を救世主と信じたることのみ、而して單純なる此の信仰は、非常なる場合に臨みて驚くべき異彩を放てり。即ち迫害者の毒手に斃れんとするに當り、從容として祈りて曰く、耶蘇よ、我が靈魂を

受け給へ。殘虐無道なる迫害者を憫みては、主よ、此の罪を彼等に負はしむる勿れ。彼は深く耶蘇に親炙して之に同化せられ、神の右に人の子の立てるを觀るに至れり。

初代基督者は自ら嚴肅なる一神教徒にてありながら、何等の疑念なく耶蘇を拜し、敢て二神を信するものと感ぜざりき。何故なれば彼等が耶蘇に對するや、在來信じたる神に對すると相等しく、神以外ならぬ意味にて彼を「神の子」と稱へたればなり。耶蘇を神の子と信じたる彼等に取りては神は實に耶蘇の父たりしなり。彼等は耶蘇に直接し、彼の父なる神を拜せり。而して日夜彼等は耶蘇化せられつゝありき。酵母はうまは三斗の粉中に投せられたり、芥子種は畑に蒔かれたり、雪か雨か、何れ變化は免れざるべし。

（三）萬國萬民の父。初代基督者は、一方に耶蘇を信じ、神を耶蘇の父と

崇めながら、他方に於ては、從來一般民衆が待望せる「神の國」を望みたり。此の矛盾せる二種の信仰は、唯奇しき實物教育を受くるに及びて始めて一致するに至れり。

彼等が朝夕仰望せる耶蘇の再臨は無く、猶太王國建設の日は望まらるべくもあらず。加之ならず、羅馬の壓迫は日一日と強く、遂に紀元七十年、羅馬軍の爲にエルサレムは陥られ、聖所と仰がれたる神殿は、戎衣いかめしき衛兵の屯所となりぬ。是に於て彼等猶太人等の希望は粉碎され畢んぬ。然れども何が眞に幸福の基となるかは、豫め圖り難きものなり。初代の基督者は、此の絶望の底に陥りて、微かすかに靈の光明を認めたり。耶蘇が示せる永久王國の意味は、朦朧おぼろにも解り初はじめてめてき。

地上、王國の觀念が、靈的永久王國に由りて代らるゝと共に、猶太の國神は、萬國萬民に通じて靈界の神となり、耶蘇の父なる神は、亦我等一人



一人の父と信せらるゝに至れり。

一九八

尤も神の國の靈化に由り、神を萬國萬民の父と仰ぐに至りたるは、必ずしもエルサレム陥落を待たざりき。此の信仰の先驅者の一人たる使徒パウロの如き、早くより異邦人の使徒を以て自ら任じたる程なれば、彼の神は猶太の國神にあらざりしなり。彼尙ほパリサイ宗にありし頃彼の慧眼は敏くも基督者の中に危険なる新分子の含まれあるを發見せり。危険分子とは、彼等が耶蘇を信じたること是れなり。常人等が意識せで有せるものを敵手として見出したる程なれば、パウロが耶蘇に於ける關係には特別なるものありて存せり。パウロは敵手として耶蘇を基督教の中心と見たるだけに、一たび信じて彼に親炙するの度も亦甚だ強かりき。パウロは回心の當初にありても、基督教てふ宗教に歸依し「たるにあらず、耶蘇の人格に接し、之に捕へられたるなり。即ちパウロは

殺氣を含み、基督者を逮捕してエルサレムに曳かんと、旅してダマスコに近づける時、眩暈して地に倒れぬ。其の時靈眼忽ち<sup>ち</sup>に開け、耶蘇の聲を聽けり。曰く、「サウロ、サウロ、何故我を迫むるや。」答へて曰ふ、「主よ、爾は誰ぞ。」主の曰く、「我は爾が迫むる所の耶蘇なり、爾<sup>ち</sup>ある鞭を蹴るは難し。耶蘇に敵するは徒らに己が身を毀損する所以なりと覺るや、主よ、我に何を爲さしめんとし給ふや。」と全く耶蘇に捕へられ、斯くてぞ彼は熱烈なる基督者とはなりにける。信仰の人となりてより、耶蘇の恩寵を感ずること益、深く、遂に自ら「耶蘇基督の僕」と呼び、「我が生けるは基督の爲、死も亦我が益なり。」最早我れ生けるに非ず、基督我にありて生けるなり。」と信するに至りぬ。此の如く耶蘇に同化せられたるパウロは、耶蘇の父を我父と信じ、萬國萬民の父と信するに至り、凡ての人を一の血より創り、悉く地の全面に住ませ給へる神に由りて、我等は生き、又動き、又存在する

一九九

を得るなりと信せり。

神は人類の父、人は皆神の子にして、神に由りて生れ、其の保護の中に生き、彼に信頼して限りなき希望を有するなり。而して神が我等の父たる道徳的方面は、先づ遺憾なく耶蘇に現はれ、而して彼を信する者に發揮せられたり。

(四)慈愛限りなき父。基督者として使徒パウロは、代表的ともいはるべき程の者なり。彼の信仰に依れば、限り無き父の慈愛は、形を成して耶蘇基督に現はれたり。彼の生涯、彼の死、彼の復活など、何れか父の慈愛を示さざる。基督なくば我は死すべき者なりしなり。我を擒にし、我を苦しめ、我を殺すもの我が裏にありて、我は常に其の苛責に堪へず、苦痛を免れんとすれば益、慕り、ア、我れ惱める人なる哉と叫喚するの外なき斷末魔、基督は我を死の體より救ひたり。基督は我が爲めに十字架に死せ

り。我が罪の身は信仰に由りて、彼と共に死し、復活せる基督を信じて、彼に生かさる。彼の中に復活し、斯くて我は基督耶蘇と生命を共有し、我が生命は基督の有、基督は我が生命と感ずるに至る。而して我は生來ならぬ別種の新人となり、基督の如き孝子の情を以て、神に向ひ「アバ父よ」と呼ぶに至るなり。何等の慈愛ぞや。

如何に神が吾等人類を愛し給ふかを示さんとして、約翰傳著者は、其の生み給へる獨り兒を賜ふほどに」と説く。神の獨生子として此の世に現はれたる耶蘇は、人類各自より神子の資格を奪はんとはせず、却つて之を與ふるなり。神の子基督を信する者は、神との間に於て障壁を成せる罪を除かれ、神の家庭なる本來の住居に歸り、神の子の生活に入る。神の獨り子人類に現はれて、人類本來神の子たること明かにせられ、獨り子の犠牲に救はれて、道徳的に人は神の子となれるなり。

パウロに従へば、我等が救はるゝには、基督に信頼するの外、何等條件あるなし。我等が救はるゝは、商賣的關係に由らず、唯一の基督に絶るにあり。若し救はるべき條件として、功徳を積むが如きあらば、こは大なる曲事たるべし。基督の功績は、吾等に移り、彼の生命は吾等に移り、吾等は救はれて神の子たるなり。限りなき父の慈愛は、之を信する者より見れば、形をなして耶蘇基督に現はる。實に絶大無比の愛！

以上略述せる所に由れば、吾等神を信する者に取りては、自然界に啓示せられたる神は、宇宙の本體にして、變化窮まりなき森羅萬象の中にある永劫不變の靈體なり。而して天地萬物を創造し統轄し、聖旨の儘に指導する大智大能大徳の存在なり。人生に啓示せられたる神は、吾等の經驗に一層近く、智慧と能力と愛情とに満ち、人類と交通し、之を愛護す

るほどの人格者なり。而して耶蘇基督に於て神は茲に具體化され、諸徳圓滿なる慈愛の父は、鮮かに吾等の眼前に現はれたり。

吾等は第一章人觀に於て、人に關して説く所極めて不十分なるを免れざりき。そは何故なりしかといへば、未だ對象無かりしに由る。總て相對的存在たる「人」は、對象次第にて如何にも變ずるものなり。然るに、第一章に於ては唯對象なく「人」を説きたるのみなれば、物足らぬ感ありしも、亦已むを得ざる次第なり。

本條に於て、吾等は神が吾等の父たることを學びぬ。是に於て第一條に不十分なりし點は補はれて、人は神の子たること明かになれり。道徳論や靈魂不滅論や、茲に基礎を得たりと謂ふべし。

### 第三章 主體と客體との關係 即ち信仰觀

伯トルストイ其の者復活に於て獄中悲慘の光景を描くや詳密を極む。中に母子の鐵網を隔てて面會するあり、應答の聲は他の喧騒に妨げられ、相抱かんとすれば、鐵網彼等を隔て、自由ならしめず、讀者をして同情の念禁せざらしむ。翻つて神と人との現在に於ける關係を見れば、頗る之に相似たるものあり。神は絶大無限なる慈愛の父、萬國萬民の父にして、又吾等一人々々の父にて在す。而して吾等は萬有の主宰者たる神の愛子なり。されば二者の抱合一致は寧ろ自然の性情に基くものなるに、何物にか隔てられて、二者和合の域に達せず、多くの宗教は其點に達せんとする煩悶苦惱に由りて成立し、其の完成を喜ぶものに至りて

は甚だ稀なり。

神人間を隔つるものは何ぞや。第三者ありて然るか。或は神の愛に不足ありてか。また人の慕ふこと切ならざるに由るか。如何にして是等の障礙除かれて、神人和合の宗教は成立するや。以下遂次之を説かむ。

#### 第一節 基督教の成立

神人和合の障礙は、吾等が叙し來りたる所によれば、神の側に之あるべしとは思はれず。神は慈愛の父にして、何等の制限をも受けざればなり。さらば神にもあらず、人にもあらざる第三者が神人間に横はりて妨害をなすやといふに、決して然らず。本來神人の關係は、其の間に第三者を容るゝほどに粗慢なるものに非ざればなり。是に於て吾等は神人和合の障礙をば人の側に歸せざるを得ず。吾等人として甚だ遺憾の次第

なれども、潔く自ら責任を負ふの極めて當然なるを覺ゆるなり。之を人生々活の事實に就きて考ふるも、親子不和の原因は多々あるべし。勿論人間の場合に於ては親の側にも過失はあるべし。而かも吾等自ら子として親を責むべきか、省みて自己の不孝を謝すべきか、或は口實を設けて責任を免るべきか、眞の子たる者、また眞の子たらんと欲する者は、先づ自己の不孝を悔ゆるを以て至當とせむ。況んや永久の父たる神の前に於て何等の辯解を要すべきぞ。吾等は唯恐懼して懺悔するの外なし。

### 一 人の罪

(一)罪の由來。人は道德的存在にして本性善なる者、加之ならず天地萬有の主宰者たる神の子なるを吾等は知れり。斯かる高貴なる存在にありながら、如何なれば罪てふ忌はしきものを有するか、是れ大矛盾にあらずや。若し人が本來尊貴なる萬物の靈長ならんには、罪はあるまじ

きなり。若し人に忌はしき罪ありとせば、本來貴き存在にあらざるなりと論ずる者なきにあらず。一應道理あるらしく聽こゆれども、淺見の譏は免れじ。之を何故といふに、本來人が犬豚と何等異點なきものなりしならば、現在の生活は羨むべきほど價值ありと謂ふべし。彼若し人を殺すとも、物を盗むとも、妬むとも又惡むとも、何等卑しむべきものあるなし。犬豚に取りて寧ろ當然なればなり。而かも本來人は貴き神の子にてありたらば、神の子らしく生活せざるべからず。犬豚らしきは人に取りて罪なり。若し人が貴き者にてあらざりせば、罪は絶えて無かりしなり。父祖代々橋下を家とする乞食の子には零落の感あるまじ。彼が橋下に住み、門前に立ちて施物を乞ふは、生來なればなり。然れども、茲に身分尊き父を有しながら、橋下の生活を營めるあらば、其の境遇は此の人に取

情に基くを知るべし。

普通に罪としいへば、直ちに肉慾を想起するが如し。果して肉慾は罪の根本なりや。吾等思ふに肉の働きが單に肉に止まらば、それは罪にあらず。何故なれば、肉は我の根本ならず、従つて行爲の責任を負ふほどに貴きものにあらざればなり。肉慾と稱へらるゝものと雖も、それが罪たる限りは靈性に關する所あるなり。或は靈が肉に壓倒せられ、主人たるべき靈性が肉體の頤使を甘んずるに至りて罪は生ず、と説くものあり。成る程此の傾向あるは吾等とても看取せざるにあらず。然れども、行爲の主體は徹頭徹尾靈性なり、肉體の行動とても靈なる我は責任を免るべきに非ず。我の本體たる靈性を壓倒し、或は之をして關知せしめず、内密に肉體が其の慾を専らにすることあるべからず。創世記に傳へられたる物語に依れば、人類の始祖アダムとイブとが最初罪に陥りたるは蛇の誘

ひに基因せり。イブ初め誘はれ、アダムは之に次ぎたり。而して事露顯に及びて、彼等各責任を第三者に歸せんとせり。敢て蛇と限らず、婦人と限らず、外部の誘惑や境遇の壓迫は極めて大なり。さらば是等の我以外に罪の責任を歸すべきか。我等思ふに決して然らず。夫れ吾等は道德的自由を有す。何者の誘ふありとも、又壓迫するありとも、必ずしも之に従ふを要せざるなり。貧窮、疾病、其の他あらゆる逆境、悲境に立つとも、吾等は境遇の奴隸たらず、却つて訓練陶冶さるべきもの。是れ他動物と異なりて人が自由を有するに由る。

罪は肉より出でしに非ず、我以外の何物にも生せず、我が罪は畢竟我自身に出で、我が靈性に絡まりて我を離れざるなり。如何にして此の罪は人類に侵入し、各人と深き關係を結ぶに至りしや。創世記の罪の起原に關する傳説に由り、一派の學者は曰く、開闢の初に當りてや、人は神に

近くして聖く、一點の罪なかりき。然るにアダムとイブが一たび墮落し、罪を犯して、人類は凡て生れながら墮落の種子を藏すと。是れ一面の真理を語るものなり。然れども、吾等は人類の發達に伴ひて罪現はれたりてふ真理、亦他の一面たるを承認せざるべからず。之を一個人の發達に見るに、嬰兒は初に當りて唯蠢動するのみ、漸くにして本能感覺は發揮すれども、道德的責任を感じるに至るまでには數年を要す。此の間に在りては、人は無罪なり。されど、其の無罪たるや、聖善の意味にはあらず、犬猫の無罪なると異なるなきなり。犬猫を聖人として崇めざる吾等は、嬰兒の無罪を羨むを要せず。聖善とは罪惡を脱したるをいふなるに、嬰兒の無罪たるは未だ道德世界の住人とまで進まざるに由るなり。而して年老<sup>た</sup>け道德的意識生じて、茲に責任の感現はる。此の時に至りて我に罪あるを發見す。我が生活は依然として舊の如く、父母の心を痛めること

に於て大差なくとも、我が發達に伴ひて、曾ては罪ならざりし行爲が今は罪となるなり。人類に於けるも亦、個人に於けると恐らくは同一ならむ。されば、人類の始祖が無罪なりしは、羨むべきほどのものにあらず。其の生活は動物に近く、人としての特性未だ現はれざりしに由るならむか。

道德的責任の念は、自由意思の發達に伴ひて現はる。未だ曾て自由なき所に責任の念はあらず。されば、創世記の傳説に現はされたる罪惡の侵入記は、一面に於て自由意思の發達を示せるなり。若しも光明に對する陰影の如く、完全に對する缺陷の如く、自由に對して罪惡の侵入は自然なりとせば、アダムとイブとの物語は、人類發達史なり。然れども責任忸怩の念伴ふを見れば、罪惡は當然の徑路にあらざるが如し。進歩は人に取りて自然なり。自由意思の發達は、當然の徑路なり。されど罪に陥る

は不自然なり。自由意思が正當に使用されずして、濫用されたるなり。吾等は自由意思の濫用に由りて罪人となりたればとて、自由意思を呪ふべからず。之なくむば尊貴なる特性を缺き、人は單なる動物に外ならざればなり。自由なくば惡の惡たることの現はれざると共に、善の善たることも亦現はれず。責任重く苦しかるとも、吾等は貴き特性を祖ふべからざるなり。

罪の起因は、各人意思の自由でありとすれば、祖先や周圍との關係は如何。我は我、彼は彼にして、兩者間何等の關係なきか。人類の始祖アダム、及びイブが、最初罪に陥りたる爲に、其の血統を受けたる世界の人類は、生れながらにして罪人なりとの傳説は、迷妄取るに足らざるものか。或は此の中に深き意義の含まれたるか。

全體罪は強き中毒性を有す。一たび之に感染せんか、容易に其の捕縛

の手より脱する能はず。而して其の惡感化は忽ちにして遠近に及ぶ。其の速さと廣さとに至りては、眞に意料の外にありと謂ふべし。斯くばかり自己性格に變化を來たし、周圍に影響を及ぼすことの強き罪が、子孫後裔に影響せずとならば、それこそ道理に合はざる話ならずや。多くの體質性情は善くも子孫に遺傳すると見え、吾等は田舎に住みし頃、未だ曾て面識なき人より、君は何某の子息にあらずや。或は何某の孫にあらずや。など、問はるゝことありき。されば、性格に根本的關係を有する罪のみが、子孫後裔に影響せずといは、不思議なり。然らば如何なる影響を子孫に傳ふるや。久しき傳説なる、始祖の罪は人類に遺傳せられたれば、人は總て生れながら罪人なりといへる中には、深意あるに相違なからむも、吾等は其の儘之を承認する能はず。若し生れながら罪人ならむには、罪は吾等に取りて極めて自然にして、毫も忸怩の念の伴ふ理な



きにあらずや、然れども誰人か罪を自然なり當然なりと感せむ、一たび罪を犯しては、之を懼れ、之を恥ぢ、心中の懊惱禁じ能はざるに至る。罪は決して人に取りて自然にあらず、生れながらの有にあらざる。祖先のにあらずして、我自身の所作なり。さらば祖先より受くる遺傳は皆無なりや、といふに然らず。吾等の經驗に依れば、罪は自己の所作なれども、吾等は罪の傾向を祖先に受けたるが如し。近來肺結核は遺傳せず唯感染し易き體質を遺傳すと説く者のあるが、罪の遺傳といふも、恐らくは此の如きか。

罪自身は祖先の遺傳にあらず、亦神の所造にもあらず、何處までも我自身の所作なり。何時如何にして人類に侵入せしや、精密に合理的研究を遂げむとするも、本來不合理にして秘密を特色とするものなれば、効果の現はるゝこと少なきも亦已むを得ざるなり。

(二)罪の事實。罪の由來に關して吾等が知る所、極めて不十分なるを免れず、而かも罪の事實は甚だ明瞭なり。國法により有罪の宣告こそ受けざれ、道德宗教の方面より見れば、天下に義人なく、一人もあることなし。常識の判斷に従ふも、吾等は當に居るべき位置に居り、當に爲すべき行爲をなしつゝ、ありとは斷言する能はず。我が良心は我の一部にてありながら、我が有罪を宣告するの常なり。斯かりければ、多くの場合に於て、良心は我が味方にあらずして裁判官なり。實に良心は我を臆病ならしむるものか。

茲に數萬の同志一族を率ゐて無人島に渡り、新たに政府を造らむとする者ありとせよ。志を同じうする者なればとて、また一族なればとて、犯罪を豫想して罰則を設け置かざれば、事は必ず失敗に畢るべし。茲に良家の子弟にして、品行學術共に優秀なる者のみを拔擢して、模範學校

を設くるとせよ、犯則者を豫想して校則を規定せざれば、事は必ず失敗に畢るべきなり。罪は人生に於ける痛ましき事實なり。忌まはしければとて、之を看過しては人生を知るべからず。反省して自己の暗黒面を覺るに至り、我は初めて我自身を解したるなり。罪なき人生は空想にして現實にあらず。

之を文學上に描かれたる人生に觀るも、吾等は罪の存在を否認すること能はず。元より今日所謂自然主義者の如く、好みて暗黒面一方を描きて、光明の方面を顧みざるは、暗黒面の恐怖戰慄すべき力をも却つて殺ぐ譯にて、望ましからず、又人生の事實を描寫したるにも非ずと雖も、然れども、全く暗黒面に眼をくれずしては、生ける人物を描くべからず。試みに世に大文學の銘打てるもの、例せばダンテの「神曲」、セクスピアの「ハムレット」又はパンヤンの「天路歷程」、其他我が國に於ける馬琴、近松

の諸作より、人生の暗黒面、即ち忌まはしき罪の事實を除去し見よ。殘る所果して何物ぞや。架空の妄談、小供騙しの御伽話と化し去らむのみ。多種多様なる世界の宗教が、悉く一致せる點の一は罪の承認なり。元より淺深高下の差あるを免れずと雖も、人生に於ける忌まはしき此の事實を認めざるものてはあらず。

罪は人生に於ける事實なり。人若し之に注意を缺きて、人生の旅路に登らんか、忽ちにして中途に蹉躓すべきなり。さればこそ世に大賢と呼ばれたる人ほど、之を恐れ、警戒するを怠らざりしなれ。

(三)罪の結果。宇宙は整然として統一されたる合理體なり。而して人生は宇宙の一部にして、合理體中の合理體なり。然るに此の合理體中に不合理なるもの現はる、即ち罪の出現是れなり。罪は其の性不合理なり、また矛盾なり。人生に罪生じて、宇宙の統一は茲に攪亂されむとす。萬乘

の君を窺ふものは、必ずや千乗の家なり。人類は宇宙間に於て至高者に亞ぐものなるに、痛ましくも反逆の要素を藏するとは、噫。

罪生じて一致せる團隊の破壊せらるゝ例は、吾等の眼前に最と多かり。親子夫婦兄弟間の交情極めて圓滿、身は異なれども心は一と稱へられたる理想的家庭に於て、唯一人忌むべき罪に陥りたらば、衆心舉つて憂ひ苦しみ、平和は茲に攪亂せられ、生活の安穩さへも支持し難きに至り、一家離散の悲境を見ること少からず。それまでに行かずとも、妻父は夫一人の心掛け悪しき爲めに、親子兄弟相互間の融和に故障を生じ、常に不愉快の月日を送る家に至りては甚だ多し。

社運隆々として日と共に榮え行く銀行會社も、模範町村として其の筋に表彰せられ、名譽を附近に誇れる自治體も、衆心和合、上下一致せる間こそ、爾はあれ、一たび要職に在る者に利己心生じ、罪の念萌さんか、衰

退の徵候茲に端を發し、遂に破綻瓦解の悲運に陥るに至る。

個人の經驗も亦之に異ならず。心中に和合統一にあらば、外部の壓迫は如何に強くとも堪へられざるにあらず。或は貧苦病苦の中にも樂しき月日を送るを得べし。而かも一たび罪の力裏に現はれむか、心中は宛然修羅場の如く、晴れ渡りたる心の空は、黒雲に掩はれ、希望の光は消滅す。而してパウロが經驗せる如く、「我が爲さむと欲する善を我はせず、却つて爲すまじと思ふ惡を我は爲せり」と號叫するに至るべし。斯くて惡に捕へられたる奴隸の如く、良心は自由を失ひ、萎靡銷沈、遂に善惡の判斷さへつかず、幸不幸の標準を誤り、自己を傷けながら、却つて快とするに至る。馬可傳第五章に記されたる惡鬼憑と呼ばれし精神病者は、罪の結果が具體化されしにあらずやと思はるゝほどに吾等の經驗に符合せり。即ち彼は耶蘇が彼を救はんとて近寄りけるに、何ぞ我を苦しむ

るやと叫びぬ。彼は己が身を傷つけて自ら快とせり。彼は己を危険より救はんとする鎖、桎梏の拘束を破毀し、好んで野猪の如く山野を馳驅せり。是れ實に自ら害へる罪の子の好標本にあらずや。

更に恐るべき罪の結果は、本來相愛の間柄なる父子間の離別となる。路加傳第十五章に記されたる蕩兒の比喻は、善く這般の消息を傳ふるものと謂ふべし。蕩兒々々と呼ばれるれども、彼は生來の蕩兒にあらず、初の程は父の膝下に侍して家業に勵みたりしなり。而して彼の心に罪成りて自由平安なるべき父の家を、甚だ窮屈に感じ初めぬ。斯くて今一層の自由を得んと、口實を設けて父に請ひ、遙けき旅路に出立しぬ。父の許を離れたる彼は、何等の拘束をも感ずることなく、極めて自由なりき。吾等は現役を離れて滿期歸郷せる兵士の心もて彼蕩兒の心情を推察するを得。自由と放埒とは相似たれども、根本的に相異なるが、蕩兒が樂し

めるは、自由にあらで放埒なりき。放埒は自由の装ひせる陷穽、陥りたる總てを捕へて罪の奴隸となさすむば已まざるなり。あはれ蕩兒は此の陷穽に陥り、定まりの如く豕飼の奴隸と成り果てたり。彼は豕よりも却つて淺ましきを自ら感せり。此の時まで彼は一切夢中なりしが、茲に至りて自己本來の價值を省み、懺悔措かず、直ちに父の家、實は當然住むべき己が住居に歸りぬ。彼の喜びや如何ありけむ。然れども彼よりも百層倍歡びたるは、長き年月待ち焦れたる父親なりき。

我を待てる慈父あるを忘却し、放埒を自由と誤まり、奴隸の境遇に陥りたる後、蕩兒は初めて我を發見したるなりき。吾等が自己を發見せるも亦之に似たらずや。我等の多くは無我夢中に半生を送り來れり。我が心情我が行爲の些細なる點にも、尙ほ御心を痛め給ふ父の面前に在りながら、之を覺らず、自己中心の生活を營み、好みて子供の自由を棄て、

奴隸の鎖に繋がれたりき。孤獨の寂寞、苛責の苦痛とても、罪の報いが自己にかゝる限りは堪ふべけむも、父なる神の御苦しみを想うては、子心ある者の能く忍び得る所にあらねど、我等の多くは今尙ほ之を覺らざるなり。苦樂共に己を中心とするのみにて、何ものにも結び付かざるなり。眞に生活中心たるべき父を離れたる子は、爲すべき業も、向ふべき標準も、定かならず、日々夜々業務に勵みながら、何の爲に、また誰が爲に之を爲すかを覺らず、手足は心なき器械の如く動くのみ。正に是れ牧ふ者なき羊、心は散々ちぢぢになれるものなり。吾等の多くは此の状態に在りて、毫も意に介する所なく、却つて之を當然の成行となす。痛ましき極みにあらずや。

人は己が罪に由りて、本來の住宅なる神の家を出でたり。久しうして

父を忘れ、住宅を忘れ、心に遣りたる神の姿亦漸くに消えて、神子の自覺甚だ朦朧となりぬ。信仰的に人は眠れり、否寧ろ死せりといふの至當ならむか。眠れる者は自ら醒むる日あるべけれど、人の靈性は自ら醒むる期無からむとす。會「鹿の谿水を喘ぎ慕ふ如くエホバの神を慕ふ心の、物然として萌すことありとも、倏忽にして消え失す。知るべし、神人關係の障碍は、人の側に生じたるを、而して人は永久に復古運動の主動者に非ざるべきを。

## 二 受肉降世

(一)常識の承認。 歐洲邊には十七八世紀頃、警察制度の不備に乗じて、山賊等の出沒斷えず、大膽なる行動をもて富豪を苦むること多かりき。盜賊といへば、我國に於ても格別珍らしからず、今尙ほ新聞紙を販はし、警察を騒がしつゝある慘事少からず。然れども歐洲邊の大賊は我國の

に比して膽太かりき。我國の盜賊は僅に有合せの現金を奪ふに過ぎざれども、彼國のは其れしきの事にて満足せざりしなり。彼等が其の家の財産に狙ひを着くるや、先づ人質として其の家の愛子愛嬢を奪ふ。某家にては愛子又は愛嬢が俄に行衛不明となりたるに驚き、舉家愁嘆に前後を忘却せる折、何者とも知らず齎らす封書曰く、何月何日午後何時までに、某の地點に百萬圓を持ち來れ、爾の愛子は無事に爾の手に歸るべし。若し約に背くか、官署に密告するか、二者何れに出づるも、爾の愛子は決して無事なるを得まじ。此の惡辣手段に陥らば、如何に吝嗇なる富豪の金庫も自ら開くべし。誰か此の場合に於て金額の多寡をいはんや、己が所有にて不足する如きあらば、力の限りを盡し、要求を満たすべきなり。

隔たりたる神人關係は頗る之に類似せり。人が拘禁せられたるは、自

己の罪の爲にて、自己以外何者の爲にもあらねど、拘禁せられて自由を失ひたる様は之に似たり。神が人を救はんとするや、其の身の代金を自己以外何者にも與ふる必要はあるまじきも、掌中の玉と愛でにし子を失ひて、身も世もあらず、慕ふ様は災禍を蒙れる富豪に似たらむか。

何は兎もあれ、人は神の家より逃亡して淋しき孤獨の生活に落ち、靈性甚だ痴鈍となり、因習の久しき、第二の性を成して不信仰を常とするに至りたれば、自ら起ちて父に歸らんとするを望むべからず。眞に是れ「善きサマリヤ人」の比喻にある負傷者なり。衣服を剝がれ、所有を奪はれ、剩さへ重傷を負はされ、流血淋漓として四邊を染め、呼吸逼迫して瀕死の状態にある者を通りかゝりし祭司やレビなど、鹿つめらしく稱へらるゝ宗教家の如く、看過ごしにするは人情に合ふことなりや。或はサマリヤの商人の如く、自ら近寄り傷口を洗ひて之を繙帶し、驢馬に乗せ

カネー 202  
12717

て旅舎に伴ひ、費用を投じて介抱するを以て人情に合へりとなすや。吾等は後者を是とし、前者を非とする者なり。是れ恐らくは萬人の一致する所ならむか。果して然らむには、負傷せる人を救はむ爲に、神が自ら人に近づき給はむこと、寧ろ常識の承認する所たり。其の事の可能なりや否やは、後項に至りて明かにせらるべきが、神若し人類の父たらば、受肉降世はありさうな事ならずや。溺れ行く愛兒を救はむとて、游泳を知らぬ母親が身を忘れて水中に躍り込むを、美はしき人間の至情とする吾等は、受肉降世して神が人に接近し給ふを以て「ありさうな」と、信せざるを得ざるなり。

(二)受肉降世の可能。「ありさうな」とはいへ、大智大能大徳の神が制限多き人となり得べきや。こは餘りに吾等の経験を超越せるにあらずや。好しや、あり得べきことたりとも、餘りに吾等の経験を超越し、全く

相觸るゝものなからんか、吾等は之を信じ能はざるなり。固より其の事を有の儘に解するは、神ならぬ吾等が能くする所に非ず。唯吾等は稍、相似たる吾等の経験を通じて、受肉降世が必ずしも不可能ならず、之を信するの却つて常識に合ひさうに思ふが故に、或人に取りては吾田引水論とも又は牽強附會の説とも見えぬべけれども、吾等は臆せずして信仰の理由を告白せんとするなり。

第一、吾等は「神己に似せて人を造れりて」ふ傳説に現はされたる如く、神と人とは根本に於て懸隔せるものに非ざるを信するが故に、受肉降世をありさうな事と思ふなり。超越神教の主張する如く、神と人とは痛痒相關せず、交通不可能ならんには、受肉降世はあるべからず。然れども思へ、痛痒相關せず、交通不可能なる神の有無は、吾等の生活に關係なきなり。超越神教は吾等より見れば、宗教にあらず。英國より佛國に渡

りて全然唯物論と化したるは、當に行くべき道を進みたるのみ、敢て怪むに足らざるなり。吾等が會て受肉降世を信するの容易ならざりしは、超越神教の傾向を帯び、神を餘りに祭り上げて、人生の喜愛に關係なきものとせしに由る。

受肉降世を信するの極めて造作なきは汎神教なりとす。汎神教に在りては受肉降世てふ名稱をも要せざるなり。神は即ち宇宙なれば、自然界の森羅萬象は、其の儘神の姿たり、神は太陽となり、月となり、山川草木となりたれば、太陽、月、山川、草木は、其の儘神に外ならず、また神は即ち人なれば、人は其の儘神の姿たり、男女老若貴賤貧富の別なく、總ての人は其の儘神たるなり。豈殊更なる受肉降世を要せむやと。こは甚だ敬虔の態度を缺く、宗教の價値は此の如き淺薄なる神觀に由りて損傷せらるること甚しといふべし。然れども、こは受肉降世の信仰を容易ならしむ

るに益なしとせず。本來汎神的思想の中に人と成りたる吾等日本人は、泰西人に勝りて受肉降世を信すること容易なる譯なるが、注意すべきは、眞面目なる態度を缺かざらんことなり。

吾等の信仰に由れば、神は宇宙にあらず、宇宙の創造者なり。故に自然界の森羅萬象には神の面影映れり。太陽も月も星も山川草木も、一として神の面影を偲ばしめざるは無し。仰いで蒼穹に星辰の燦々たるを見れば、神の偉大を解すべく、俯して庭園に百花の爛漫たるを眺むれば、神の愛を覺るべし。神は人にあらずと雖も、己に似せて人を造れり。故に一層強く人生は神の姿を靈的方面に現はせり。總ての人は神を現はせり。と雖も、完全に近き人は其の神を現はせること愈鮮かなり。聖者、君子は神に近き人々なれば、従つて強く神の徳は彼等に現はれたり。聖人の出現は、受肉降世に類似せるものにて、確かに其の準備をなし、段階となれ



り。尙ほ完全に自己の慈愛を知らしめんとて、唯一人格に由つて受肉降世するとも、強ちに信じ難からず。正に是れ神は己の國に來り己の家に歸りたるものなり。

第二、吾等は神を慈愛深き父と信するが故に、受肉降世をありさうな「こと」と思ふなり。吾等神を隔つること甚だ遠く、品性極めて陋劣なる者ながら、尙ほ多少愛の經驗を有す。さらば問はん、愛とは何ぞや、最高なる愛とは如何。吾等の經驗に依れば、吾等は喜びて愛する者に物品或は勞力を與へて惜む所なし。されば愛とは、物品或は勞力を與ふるものなりとも答へらるべきか。愛の深さ加はるに従ひて、如何なる貴重品をも厭はずして與ふるに至る。また如何なる勞苦をも辭せざるに至る。否、生命をも惜まざるに至るなり。是に於て吾等は愛の答解を得たり。曰く、愛とは自己を與ふるものなり。然り、自己を與へ、同情同感相通じ、苦樂喜憂

を共にする。是れ愛の働きなり。子女を養育する母親に此の愛は現はれたり。寒暑を厭ふは元よりのこと。若し其の愛兒が重患に罹りたらんか、母の苦痛は病兒のそれに勝るとも劣らざるなり。

與ふるは愛の働きなり。而かも毒藥を與へて對手を害するが如き、之を愛といふべくむば誤れる愛と謂はざるべからず。其の他、品性を傷つけ發達を妨ぐる原因たるべき物品を與ふる如き、高き愛といふべからず。是に於て吾等は知る、愛の高下は施物の性質に關係するを、自己を與ふるは愛の働きなり。而かも自己の品性高潔にして、之を受けたる者を益する所大ならずむば誤れる愛たるを免れざるなり。實に愛の高下は品性と分つべからず。品性下劣なる者は高き愛を有する能はず。また解すること能くせざるなり。

吾等は神を以て最高の愛と信するなり。我等は彼を知ること鮮なか

らねど、彼は吾等を解すること全く有の儘なり。我等の有の儘は神に知らる、吾等の寂寞は彼に知られて彼の寂寞となり、吾等の懊惱は彼の懊惱となる。吾等は此の世の快樂に心を奪はれたる中こそ無我無中にてはあれ、一たび我に歸りては、一日も神無くして生息すべからざるを覺るなり。神が吾等に於けるは、恰も母親が病兒に於けるが如きか。母親は自ら病兒となり能はざる制限の下にあれば、同情同感の現はるゝは心のみにて、形に表はるゝこと少なし。況んや母親の慈愛は、利己心に由りて傷害せらるゝの大なるをや。若し母親にして無制限の力と最高の愛とを併せ有せんか。必ずや病兒を救はん爲に必要ならば、自己の生命を棄つべきなり。

神は慈愛深き父、宇宙に制限せられずして之を統轄せる存在なり。而して吾等は瀕死の状態にある病兒の如く、靈的生命甚だ衰弱せり。信仰

の要求裏にあれども、自ら覺らず、吾等に父を現はし給へ、さらば足れりと煩悶の聲は微かなれども、最と悲しげなり。此の時に當りて慈愛深き父は、自らを吾等に現はし、我を見し者は父を見しなり」といひ給ふとも怪むに足らざるなり。

第三、受肉降世の信仰を助くる第三の鍵は、自己制限なりとす。吾等は之を舊約全書の傳説に讀む。昔ノア時代の洪水に懲りたる人民等は、此の如き災禍を免れんとてか、塔を築きて天に達せしめんとせり。漸次年を経て高さを増すに従ひて、遂に上層に在る者と下層に在る者と、言語相通せざるに至れりと。上なる者と下なる者と、言語の相通せざるは、必ずしもバベル塔上に限らざるなり。今日に於ても、道德、智識、宗教の相等しき者にして、初めて互に相通するを得、然るに嚴密なる意味にて言へば、百人百様、千人千様にて、同程度の者とはあるべからず。故に自然

の理より推せば、言語思想は殆ど全く相通じ難きなり。而かも實際に於て智識懸隔せる朋友間、また年齢相若かざる親子間、さては特性を異にせる男女間、互に交通し、敢て不自由を感ぜざるは何故ぞや、高き者が自ら制限して、低き者と同程度に降るを以ての故ならずや。

賢愚兩者の交通を完うせんには、愚者が賢者となるか、賢者が愚者となるか、二者其の一に出でざるべきが、愚者は決して賢者となり能はざるなり。賢者とても全然愚者とは變り能はずと雖も、自ら制限して愚者の程度に降るを得、自己制限は、師弟又は父子間に於て著しく發揮せらる。經驗と智識とに富める父親が――若し彼をして日比谷原頭三百の代議士中に立たしめば、堂々たる一方の雄ならんも――舌の根の善く整はざる幼児と談話する様を見よ。彼自ら經驗乏しく智識淺く、舌の根未だ整はざる三の兒の如き觀あるにあらずや、幼年生徒の面前に立てる教

師も亦此の如し。彼が智識の有りだけをさらけ出さば、生徒等は唯面喰ふのみにて得る所なけむ。教師は善く之を辨へ、一年生の前に立ちて、彼は一年生の如く語り、四年生の前に立ちては、四年生の如く語るなり。兩者交通の場合に於て、先づ上なる者は自己を制限して下へ降り、同一程度となり、次に下なる者は、上者の感化薰陶に由りて上進す。是れ人生に於ける智識道德界の事實なり。而して此の自己制限の動機は愛にして、それが實現するは力に由る。然るに人生に於ける愛と力とは、内に品性の制限あり、外に自然法の壓迫ありて、其の現はるゝや極めて不完全なるを免れず。六十の老爺は如何に腕くとも、三歳の娘子と化し能はざるなり。而かも吾等は不完全なる自己制限の經驗を通じて、完全なる神の自己制限を推知せんとす。彼は愛と力とに満ち、内外に何等の制限なし。神の形にて居りしかども、自ら其の神と等しくある所のことを棄て

難き事と思はず、却つて己を虚しうし、僕しもの貌かたを取りて人の如くなれり」とパウロが教へたるは眞ならずや。

神若し愛と力とに缺くる所あるか、或は人の衷心に我等に父を現はし給へとの要求なきかならば、イザ知らず、人には深き要求あり、神は愛と力とに満ちて在まさば、完全なる自己制限茲に現はれ、神人交通の端緒開かれたりと信ずるとも、吾等の経験以外にはあらざるなり。

或は曰く、全能なる神が肉體を受けて、制限されたる人となるとは受取り難き話なりと。一應道理ある疑問なり、然れども、論者の所謂全能は、論者自身一定の制限を附したる全能ならずや、吾等は全能と信ずる場合に於て、之に制限を附せざるを適當と信ずるなり、勿論全能なる者は、何等の制限を受くべからず、而かも自ら制限し能はずとならば、そは全能者にあらざるなり。

三受肉降世の結果。神は受造物なる自然界の森羅萬象中に其の面影を偲おもはしめ、特に人生の靈的方面に於て著しく、彼自らを顯現せり、更に釋迦、孔子及びマホメットの如き、世に傑出せる偉人に於て、神の徳は尙ほ強く顯現せられたり、然れども、未だ曾て耶蘇基督に於けるが如く鮮明なる啓示はあらし、彼は明かに神の子たる意識を有せり、而して吾等人類に向ひて父の愛を示し、我等をして神の子たるを自覺せしむるを以て、其の使命とせり、彼の教訓は巧妙ならずとも、權威ありき、彼は神より來り、神と共に居ると告げ、我を見し者は父を見しなり」と諭しぬ、彼が無限の愛に引き着けられて、憐れなる貧者、病者は、彼が到る處に蜚集しぬ、彼は彼を愛する者の一人だも、空手にして去らしめざりき、即ち貧者をして福音を聴かしめ、靈に富ませて満足せしめ、跛者を歩ませ、癩病人を潔め、盲者の眼を開き、其の他の頼りなき病人を癒やしぬ、彼は惱め

る弟子等を救はんとて、暴風怒濤を戒しめて之を静め、一人子を失ひ、愁嘆度なき寡婦を憐れみては、死者を甦らしめたり。尙ほ驚くべきは、神の外誰か人の罪を赦すを得んや、との信仰に育ちたる彼が「爾の罪は赦されたり」と宣告せることなり。而して之を爲すや極めて平靜、當然爲すべき日課を了へたらん様なりき。

彼は渾身愛に満ちたりき。恃り背ける世に於て愛の當然の結果は犠牲なりき。然り彼の生涯は犠牲なりき。彼世に出で、悪まれ迫害せられ、而して殺さるゝ者の至幸至福なる所以現はれたり。彼の死も亦犠牲なりき。少くとも彼自ら意識せる所は多くの人に代りて生命を棄てんことなりしなり。彼が示せる犠牲は、長いものに卷かるゝ底の強者に對する弱者の餘儀なき屈伏に非ず、幼兒に對する母の犠牲、また不孝兒に對する父の苦悶なりき。

單り愛を以て解せらるべき愛の凝結して體をなせる耶蘇は、至高者の愛の顯現にあらざりしか。受肉降世の結果にはあらざるか。吾等は人類に對する神の慈愛が體現したる犠牲の血塊と、耶蘇を信する時に、彼の自覺言語、舉動に思ひ當る節甚だ多く、多少彼を解したるやの心地するなり。

昔時イレニウスは曰ひき、彼は吾等の如くなりぬ、そは吾等が彼の如く爲り得む爲なり」と。然り、神先づ人となりたるは、人を神の如く爲さん爲なり。耶蘇人生に現はれて、人は神が如何なるものかを知り、同時に神の子たる人が如何なるべきなるかを學べり。耶蘇は上よりの犠牲に由りて吾等の罪を赦し、汚穢を潔め、吾等の信仰を通して、新らしき神の子の生命を附與しぬ。此の生命は、永劫亡びざるのみならず、源泉を神に發する、豊富窮まりなきもの之を永生と新約著者は記せり。永世は永久不

死なるのみには非ず、神と交感する靈の生命にして、高さ、幅、深さに於て無窮なるを意味するなり。貴きかな、受肉降世の結果として吾等に永生を賜はりたり。貴きかな、耶蘇の降世。

吾等は救拯に關して管々しく議論するの煩累を免れんとす。由來神人關係に、二千年以前猶太に於ける時代思想たりし國家的觀念の混入せる爲に、父子關係であるべきを、何となく君臣關係でもあるかの様に信せられたりき。是を以て救拯に關して法律的解釋さへ生ずるに至りぬ。

然れども、吾等が耶蘇の最高根本思想と信する所は、神を父とすることなり。之を最高根本思想と信するが故に、吾等は神を王とする思想を排除せざるべからず。神を父と信じ、國家的觀念に代ふるに家庭的觀念を以てすれば、管々しき救拯論の煩累を脱するを得んか。

耶蘇は慈愛深き父の旨を受け、逃亡せる不孝兒を搜索に來れるなり。逃亡とはいへど、此處より彼處に逃るゝといふが如き、空間的のものにあらず。其の心に神を忘れ、毫も慈愛を感せず、自ら害ひ、神に背き、恬として恥づる所なき、心靈的逃亡なり。故に之を搜索するといふは、心を更めるを意味するなり。如何にして彼は更心せしめしや。彼は神の愛を示したり。憐れる者に對する血の涙を、其の生活に現はすを以て足れりとせず。十字架上に顯はしたり。怖ろしくも亦貴き犠牲なるかな。吾等は神の慈愛の無限なるを信するの外、人爲的解釋を試みるの勇氣を有せず。唯知る、耶蘇基督を受け、其の犠牲を信する時に、久しく繋がれたりし繩目解かれて、靈魂は自由を得、新たなる生命加はりて、神を父と慕ふに至り、心中の暗雲忽ちに晴れて、希望の光、照り輝くを、固より過ぎにし罪の報いなる災害は、悉く之を免るゝ能はずとも、新光明に照らされては、患難

苦痛も恩寵と化し、猝猛なる悪魔の姿も、立ろに優しき天使の形に變るなり。

是等の變化は、一に十字架上の基督より來る。十字架は基督に結び着けられて、斯教中重要なるものとなれり。吾等は如何に十字架を見るべきか。日常信仰の經驗を述ぶるは、敢て蛇足にもあらざるべし。先づ第一に注意すべきは耶蘇の意識なりとす。外面より觀れば、彼が十字架に死したるは、刑人としてなりき。而かも彼は、凡ての人に代りて死せるなりき。彼が生命を棄てたるは、凡ての人に生命を與へん爲なりき。彼は外部の壓迫に自由を奪はるゝ者にあらず。外部の境遇は如何にもあれ、彼は其の爲に餘儀なくせられず。常に平靜にして、當に爲すべき業をなしたるなり。吾等は彼の意識せる所に由りて、十字架を通じて神の慈愛を學ぶなり。罪人を救はんとすの神の慈愛は、悲慘なる基督の犠牲に現はれた

り。愛の使者たる基督は、何故に早くより我等の爲に犠牲となるべき覺悟ありしかといへば、限りなき神の慈愛は、峻嚴なる正義に根ざせるに由る。神の旨と人類の現状とを明かに洞察せる基督は、十字架上の責き犠牲に正と愛との調和を示さんとせるならんか。基督を通じて神を仰げば、至正にして至愛なり。至正と至愛とは互に相反せず、相俟つて完し、而して二者共に十字架に由りてのみ解決せらる。

第二に吾等は道德的責任の念を一層強く考ふるに至らざれば、十字架の意義を解すべからず。金錢上の負債に對しては、其の責任を輕々に考ふる者世に少からず。斯かる人は、幾度催促するも平氣なり、加之ならず。遂には債主の無情を啣つに至る。少額の負債にても日夜之を心にかげ、督促を待たで返濟する人あり。斯かる人は、貸主の恩義を生涯忘却せざるなり。道德上の責任の念も亦之に等しく、自己の言行が、他人に損害

を興ふるとも、極めて恬然たる人あり。僅少の過失にても、其の責任の重きを恐れ、報酬補填せでは已まじと心掛くる人もあり。此の種の人は十字架の眞味を會得すること容易なるべし。我が些細なる罪惡も世を毒すること量るべからざるものあり。嗚に世を毒するに止まらず、自己の靈性を傷つくるの尠少ならず。之が爲に天父の御心を傷め奉ることの大なるを思ひ見よ。吾等は幾度か不孝の罪を重ね、慈父の御顔に唾せしかを思ひ見よ。過去をして過去を葬らせ、我は寧ろ未來に生きんと覺悟するとも、過去の我と現在の我とは別人ならざるを如何にせんや。況んや現在に於ても、我が願ふ所の善は之を爲さず、却つて我が願はざる惡を爲すの屢なるをや。過去より現在に涉りて犯せる罪は、總て鮮かに神に知られたり。而して亦我が靈性に刻され、品性は其の爲に彩色せられたり。ア、我れ惱める人なる哉と責任の恐ろしさを自覺するに至らば、

第三に述べんとする如く、十字架を局外者として見ざるに至るべし。十字架と我とを結び付け、我身を十字架上にかけて眺むるに至らば、罪の責任を解すべく、我が爲に流せる基督の血の貴さをも會得さるべし。不潔物に衣服を汚せる母親の姿は、二目とは見られざるべきも、我が爲に斯く汚れしかと思へば、無下に貴からずや。他目より見ればこそ、看護婦の務めは卑しくもわれ。介抱受くる患者より見れば、生命の親とも思はるべきなり。十字架は第三者の地位に立ちて批評せらるべきものにあらず。逃れ場なき罪人なる我と連結し、我が爲めの苦痛、我が爲めの犠牲と信じて仰ぐ時に、貴き眞味は解せらるべきなり。目も當てられざる慘狀は、無限の恩愛の微證かと唯有難くぞ拜まる。

十字架の神祕的犠牲に山りて、功績無くして救はるゝの道茲に開か



れ不思議にも之を信する者は神に歸る。受肉降世の結果は失はれたる子等の回復となりぬ。罪の障礙は破毀せられて何等の隔てなく、樂しき父の家庭に呼び返されぬ。今にして思へば、過ぎにし日の我ばかり恨めしきはなし。果して我なりしか、我裏に我敵の住ひしにはあらざりしか。過去の我は之を思ひ出すだにも恐ろしく亦恥かしき心地するなり。

### 三 聖靈

(一)信仰の主動者。耶蘇の降誕に由りて、神は父たる慈愛を現はし、耶蘇の死に由りて救の力を人類に賜はりぬ。吾等が知れる限りに於て、耶蘇基督は完全なる神の啓示者なり。而かも是れ客觀的啓示にして、之を信せざる人に取りては、何等の價値を示さざるなり。正に豕の前に聖物を、また犬に眞珠を投じたらんが如し。寶の山に登りながら手を空しうするは、労働を厭ふ故には非ず。寶の價値を識別すべき能力を缺けばな

り。寶の寶たる所以を知らば、誰か手を空しうして歸るべきぞ。耶蘇基督を得たる人生は、正に寶の山に別け入りたるもの。而かも尙ほ自ら貧しきを啣つは、玉石を別ち能はざるに由らざらんや。耶蘇基督を受けたる子等は、財貨寶玉の填充せる金櫃を賜はりたるもの。尙ほ乏しきを嘆くは、鍵を有せざるに由らざらんや。然れども、神が人類を救はん爲に、之を寶の山に導く以上は、玉石を甄別すべき能力をも併せ賜ふべきにあらすや。金櫃に併せて之を開くべき鍵をも賜ふべきにあらすや。人類の救主、神の客觀的啓示者として、基督は降世しぬ。之を信すべき力、主觀的啓示無からんや。

吾等が所謂主觀的啓示は、古來聖靈と呼ばれて基督者間に信せられたり。聖書の中には、時に神の靈、また基督の靈、また慰藉者、指導者など、記さる。教授クラク氏は、之を「人の中の神」と稱へたるが、吾等は寧ろ「我

裏の神と呼ぶの一層適切なるを覺ゆるなり。されど、我裏或は我外と呼ばんとする時、吾等は動もすれば物質的に制限を加ふるが如き傾向を有す。こは警戒すべきことなり。我裏といふは、我に密接し肉迫せるを意味するにて、必ずしも内外をもて制限するにはあらず。

古來信せられたる所に依れば、吾等は先づ聖靈に感化せられ、刺戟せらる。甚だしき場合に於ては、感興自ら湧き、恍惚として忘我の境に遊ぶことすら珍らしからず。それまでに行かずとも、何時となく耶蘇を我救主と信賴するに至る。以前には格別氣にも留めざりし宗教上の眞理が、ひし轟々と胸に應へ、興味を覺ゆるに至る。而して我精神の變化に伴ひ、知らぬ間に我行爲にも一大變化の來せるを發見す。是等變化の原因は、總て聖靈に歸せられたり。

聖靈は我良心なりや、否、聖靈は我に非ず、固より我良心にあらざるな

り。我は反省するとも、非我なる聖靈を意識せず。我精神、我行動は、何處までも我精神、我が行動にして、敢て何物の干渉も保護も我は意識せざるなり。然れども、我自由を毫も傷害することなく、人格者の本領を毀つことなく、我を誘導する或者の存在を吾等は否認する能はず。吾等の經驗は、寧ろ之を信するに近きが如し。我は自ら信じ、自ら行ふ、されど其の自らを刺戟し感化する聖靈を疑ひ能はざるなり。總て信仰道德の力は、壓迫に由りて來らず、受けたる者は其の受けたるを意識せざる中に感化を受くるの常なり。人生に於ける此の經驗を通して吾等は聖靈の感化を信せんとす。

鞍上人なく、鞍下馬なきに至れば、馬術の達人と呼ぶる。人は鞍下馬あるを忘れ、馬は鞍上人あるを意識せず、二者の精神融合一致し、極めて自由なり。馳驅停立、騎者の意に従ひながら、馬は之を覺らず、自ら好んで山

野を駆け廻るの思ひ。若し未熟者鞍上にあらば如何。重量の均衡、手綱の伸縮に一定の度なく、右手綱を牽かれて右廻せんとすれば、忽ちにして左手綱。達人の手に握られなば二本の力杖ともなるべき手綱に苦しめらるゝこと一方ならず。馬の迷惑言ふべからず。聖靈の我に於ける豈啻に達人の馬に於ける類ひならんや。

(二)信仰發展の原動力。使徒行傳は、初代基督者が如何に生活せしや、如何に傳道せしや、を傳へたる記録なるが、一名聖靈行傳と稱せらる。弟子等の精神を鼓舞し、行動を指導せる靈力の顯著なるより、此の名稱は起りしならむ。初代基督者に限らず、基督を信する生活は、等しく聖靈に由れる生活なり。凡そ聖靈に由りて生れざれば、耶穌を主といひ能はざればなり。由來基督教に在りては、聖靈に由れる實際生活を重んぜられたり。時に應じ、所に従ひ、必要なる智慧と力とを授くるものを聖靈と信

せられたり。人若し爾等を集議所に引かん時、何を言はんと思ひ煩ふこと勿れ。其の時言ふべきことは、聖靈爾等に示すべし。如何なる場合にも、聖靈は我裏に在りて指導獎勵を怠らすと思はれたり。

聖書は基督教會に於て重要な位置を占む。基督教は唯是に依りて保存せられ、傳道せられたりと考ふる者すら無きにあらず。聖書は勿論重要な。然れども、聖書の基督教に於けるや、恰も武器糧食の國家に於ける如きか。國家の領域を擴張せんには固より、現在の儘にて維持せんとするにも、武器糧食は缺く可からず。而かも是れ國家の生命にはあらず。武器糧食を山積すとも、國家とはならざるなり。武器糧食の國家に必要なるは主としてにあらで従としてなり。聖書の基督教に於けるも亦従としての必要なり。聖書は基督教自身にあらずして其の要具たり。基督教の維持發展は、信仰生活の繼承に由りて断えざりしなり。基督教は

實際生活を重んず、生活の外に基督教を發見すべからず。聖靈の指導に由りて基督を信じて營む生活、其處に基督教は在るなり。

聖書が普通の古文書と爲り了らず、常に新生命の附與者たるは、聖書自身に關係なしとはいふべからざれども、主として讀者が讀書力(信仰的生命は、聖書の唯一讀書力なり)を有するに由る。幾十回繰返して聖書を読むとも倦むことなく、毎回新意義を發見し、新興味を覺ゆるは、潑刺たる靈的生命を讀者が有するに由るなり。佛教は書籍教なるやも知れず。經典は其の中心を爲せるが如し。各派の分離せるも、一に經典に基けり。回々教は書籍教なり。コウラン一部を除けば、世に教は遺るまじ。されど、基督教は生活教なり、聖靈教なり、日常普通の生活に現はれたる生ける宗教なり。之より聖書を除け、さらば再び聖書に代るものを産み出さむ。今日の所謂聖書も、此の如き必要より産み出されたるにて、先づ聖書

ありて而して後基督教出で來れるに非ざるなり。

古來屢似而非基督者の爲に重要な聖靈の信仰は忘却せられ、日常生活は輕んぜられ、基督教は危機に遭遇せり。諸種の信仰問題を會議に由りて決議し、之を終局權威と爲したるは其の一なり。僧侶なる一階級生じて、専門に宗教上の業に與かり、一般人民は唯僧侶に依頼するを以て足れりと爲したるは其の二なり。聖書の解釋は一に法王に由ることとし、自由解釋を許さざりしは其の三なり。斯くて生命の宗教たる基督教は、アハヤ骸骨の宗教に化せんとせり。世に宗教を厭ふ者あるは、此の骸骨の爲なり。美はしき實際生活、聖靈の指導に基ける宗教を厭ふ者は、惡魔の外にあるまじきか。

危機に遭遇せること、尙ほ幾回なるを知らずと雖も、常に聖靈は最後の勝利者なりき。今日に於ても、基督教は日常生活に現はれ、生活を通し

て發展しつゝあるなり。己が身を神の宮と信じ、内在の神たる聖靈に柔順なる者の傳記は、之を聖靈の傳記とやいはむ。

#### 四 三重説

(一)是れ實際問題なり。こは普通に三位一體と稱へられたるものなるが、一層穩當なる言語をもて表白するの必要なるを認め、試みに此の新熟語を案出せるなり。

三重説に由りて表はさるゝ普通の意義如何といへば、神を一面より仰げば絶対無限なる唯一人格なるが、他面より見れば、父子及び聖靈の三人格なり。而して父、子及び聖靈は、各神の三分の一にあらずして全體なりといふにあり。

由來三重説は、甚だ難解にして、容易に近づき難きもの、眞言祕密か八幡不知の藪かの様に思はれたり。是れ單に哲學問題とせし故にあらず

や。神の内容論として扱はれたる故にあらずや。學者は曰ふ、神は世未だ成らず、人未だ生れざる以前より、愛の神なり。彼の愛は絶対的にして世と人とを俟たざるなり。然れども愛は本來相對的のもの、少くとも三要素を具備せざれば成立せず、即ち(イ)愛する者、(ロ)愛せらるゝ者、(ハ)二者相愛の關係是れなり。神が絶対的愛者たるは神の内容に三要件を具備せるに由る。父と子と聖靈とは即ち是れなりと。或は然らむも知れねど、是れ難問なり。吾等の智識と經驗とを超越すること甚だしと謂はざるべからず。

事實は常に學説に先つ。世に生理學出で、而して後に生命は發生せざるなり。醫學發達して、然る後に病むにあらざるなり。生命てふ事實ありて生理學生じ、病人ありて醫學は出でたるなり。然るに、動もすれば枝葉たる學問を誤りて根本となし、根本たる事實を却つて枝葉となして

輕視せるの多きぞうたてき。

三重説が盛んに論議せらるゝに至りしは、第二世紀後半以來のこと、三重説てふ用語の出でたるも、亦従つて後世のことなりき。此の思想の哲學的方面には、何となく希臘趣味を帯びたる心地せられざるにあらず。然れども此の問題は當然起るべきものなりき。何となれば其の信仰の事實は、最初の教會以來既に存在したればなり。馬太傳の末尾に記されたる「父と子と聖靈」の語は、兎も角、パツロの手翰中にも「主耶穌基督の恵、父なる神の愛、聖靈の親しき交り、限りなく爾等凡てと共にらんことを」と記されたり。加之ならず、彼等初代の基督者は、嚴肅なる一神教徒にてありながら、心に何等の矛盾なく、基督を禮拜せり。吾等は生來宗教的幫間として養育せられたれば、禮拜を重んぜず。朝に天滿宮を拜し、夕に春日社を拜むなどは珍らしからず。然れども彼等猶太人は、慈母の膝に

眠る頃より、我の外に神ありとなすべからず。「我は妬みの神なり。」などの律法を學びたり。或歴史家が評せる如く、彼等は己が姓名よりも強く律法を記憶せり。而して生命よりも重きものとして之を遵守せり。此の如き習慣性癖を有せし彼等が、何等の矛盾を感じることもなく、基督を禮拜せるは、神と等しく彼を信じたるに由らすんばあらず。耶穌を捕へて十字架上に慘殺せる者も、耶穌自ら己を神と等しうせりといふを口實にせしが、耶穌を信じたる者は、耶穌の意識に従ひて其の儘神を信じたるなり。尙ほ彼等は迫害者を恐れず、其の面前に於て、人に従ふよりも神に従ふは爲すべきの事なり」と公言し、神の外に何者にも従はじと決心しながら、聖靈の言はしむるに従ひて語り、其の行かしむるに従ひて行きたり。少くとも彼等は爾しかく信じたりしなり。聖靈も亦彼等に取りて、神たらざりしか。

學說の生れざりし以前に於て、此の如く神は三様に信せられたり。是れ信仰生活に大なる關係あるに由らざらんや。吾等は難解の哲學問題となさず、實際生活に如何なる關係あるやを學ばんとするなり。

(三)三重説と信仰生活。吾等は足未だ其の地を踏まず、眼未だ其の物を視ずと雖も、外國に關して多少の智識を有す。ロンドンに斯くもあらんか。米國の民情は云々ならんと想像するなり。而かも是等の智識は、或、仲介者を通して得たるものなれば、其の價值は仲介者に由りて定まるなり。此處に一泊、彼處に一憩、宛然早飛脚の如き旅行家にして、僅少の實査に、新聞雜誌に現はれたるものを加へ、針小を棒大せるが上に、あられもなき想像を混和し、斯くて一書を著はし、或は賞め或は譏るなど、一に自家の好む所に從ひて論斷するあり。此の如き仲介者を通して得たる智識の頼む可からざるは言ふまでもなし。吾等は宇宙に關し、人生に關

し、また神に關して多少の智識を有す。然れども、其の智識の價值は仲介者次第にて定まるなり。自ら何等の實驗なく、又權威なく、甲説に乙説を接ぎ合せたるぐらゐにて、宇宙、人生若くば神を吾等に知らしめんとする者あり。此の如き仲介者に由りて與へられたる智識は、眞を隔つること甚だ遠しと謂はざるべからず。

吾等は宇宙萬有を創造し且つ統轄し、特に人類を愛する父なる神に就いて學ぶ所ありき。而して之を學ぶや、自然界を仲介者とし、人生を仲介者とし、特に聖人君子を仲介者となして、尙ほ不足を感じき、遂に耶蘇基督を仲介者となすに及び、吾等は生ける神に接せるの感あるに至りぬ。父と我とは一なり。「我を見し者は父を見しなり。」我が行ふ所の業は我業に非ず、我を遣はせる父之を爲せるなり。などの告白に表はれたるが如く、耶蘇は神にして、神の行爲を世に示さん爲に降世せる者にあらず

や。一面に於て、耶穌は即ち耶穌なり、彼の意識する所に由れば、神の子たるなり。他面に於て、彼は受肉せる神、即ち彼と神とは一なりき。耶穌若しカント、ヘーゲル等の如き思索家たりしならば、彼が現はせる神は抽象的觀念に過ぎず、何等の生命を吾等に附與し能はざりしならむ。彼若し半神なりしならば、彼が現はせる神は半神に過ぎざりしならむ。吾等は他の半神を見ざる限りは、不安の念に堪へざれども、誰かそれを吾等に示すべきぞ。耶穌を通して父なる神を信する吾等は、聖書に現はれたる彼の自意識を是認して、彼を神と信するより外に途なきを覺ゆるなり。

方今世界三聖の一人として、我國異教者の間に於てすら耶穌の傳記は愛讀せらる。されど耶穌の偉大は、他の二聖と聊か其の趣を異にするあり。釋迦及び孔子の尊嚴は、彼等自ら具有せるなりき。釋迦は單に釋迦として、孔子は單に孔子として偉大なりき。耶穌も亦、彼自身に於て偉大

ならざりしにあらねど、特別に偉大なりしは啓示者としてなりき。遣はされたる者としてなりき。其の尊嚴は、御上使として有せるなりき。二聖の偉大は人として、地に着けるもの。耶穌の偉大は背景に天を有するに起因せり。若し慈愛深き神無からんか、耶穌が教へし所は空砲の如く、實なきものなりしならむ。失ひたる子を搜索する父無からんか、耶穌の愛は虚偽なりしならむ。尙ほ一語に之を言へば、神ありて耶穌の偉大は現はれたるもの故、神なくば彼の人格はゼロとなる譯なり。吾等は天地萬有の主宰者にして、吾等一人々々を愛育し給ふ神を信じ、耶穌の偉大を認むる者なり。

何を根據として耶穌基督を信じ、又神を信するや。耶穌基督吾等に神を現はすとせば、基督を誰が吾等に教へ、信せしむるに至りしや。牧師か、友人か、否々、彼等如何に熱心にして親切なりとも、我が頑強なりし心を



碎き得んや。さらばサマリヤ人等が「今爾の言ひし事に由りて信するに非ず、我儕自ら聽きて、こは誠に世の教主と知りたればなり。」と言ひけん如く、自己の實驗を以て信仰の根據となすべきか。實驗は強き證據たるにあらねど、單に自己の實驗に止まるならば、自己と共に動搖すべきなり。信仰の根據としては、實驗以上のものありて、實驗の根柢たるを要す。聖靈を信するは之が爲なり。聖靈は我が靈に肉迫し、刺戟し、また獎勵し、啓發して、我に信仰力を與ふるなり。而してこは神の使者なりや、又手翰なりや、否、聖靈は生ける人格者なり。彼は我が祈禱心を鼓吹せん爲に、我に先ちて祈る。此の聖靈は天地萬有の主宰者なる愛の神なり。如何なる神なるやは基督に由りて現はれたり。之を基督の靈とも呼ばれたるは理由ありと謂ふべし。耶蘇曰ひしことあり、我は人の證明を要せず、我を證明する者は聖靈なり」と。

基督は人格者なり、彼は自ら語り自ら祈禱せり。されど彼の人格は彼を遣はしたる神の人格と相通せり。我等が彼を信するに至るは、裏に内在の神たる聖靈の我が心を動かせるに由る。是に於て吾等は父なる神子なる基督、及び聖靈の三者が密接に相關聯せるを見る。相關聯せるに止まらず、一面に於ては、基督は其の儘神自身、聖靈も亦神自身なりと信する。は日常の信仰生活に關係すること、決して尠少にあらず。吾等は之を信するが故に、此の救拯の道が神より出でたるを疑はざるなり。

(三)是れ超數理的なり。吾等が信する所に依れば、父、子、及び聖靈は、互に完全せる神にして、足らざる所なかるべきなり。即ち父はそれ自身に於て完き神なり、子も聖靈もそれ自身に於て完き神なり。假に唯一絶對にして完き神をイ神と呼ぶとせば、父も子も聖靈も各、イ神にして、三分の一神に非ず。然れども神が人生に關係する限り、彼は單に父にてある

べからず、子また聖靈にてあるべからず、三者相俟ちて完きを得るなり。父の神は嚴として在まし、完全におはすとも、子の神人生に出現し、聖靈の神我が裏に活き給はずば、彼は人生に關係なかるべきなり。子の神人生に現はれたりとも、父の神儼然として在まし、其の背景をなし、聖靈の神我裏にありて我心を啓導するなくば、人生に關係なかるべきなり。聖靈の神我裏に活くるあるも、父なく、子なくば如何に何を現はすべきぞ。孤立せる聖靈は人生に關係なかるべきなり。人生に關係なくんば宗教にはあらず。故に父、子及び聖靈の中一を缺かば、宗教上神を完全といふべからず。父、子及び聖靈は、各、完全なる人格なりとも、そが人生に關係する場合に至れば、三者互に關聯し相俟つものにて、孤立せるにはあらず。吾等が信する神は、父、子、聖靈にして、而かも唯一なり。

父、子及び聖靈が各、完全なる人格者にてありながら、三者合して三人格とならず、完全なる唯一人格を爲すといふは、數理上許すべからざることに屬す。之に關して學者屢、合理的説明を試みたれども、吾等は未だ満足するほどの解釋に遭遇せざるなり。されど、神を唯一と信する場合に於ける、唯一の意義如何を考ふれば、先づ解釋の一端を握りたるやの心地するが故に、左に之を述べし。

普通吾等が使用する語の中、「一」は數量の比較を示す單位なり。即ち「三」は其の中に三個の「一」を含むものにて、「一」の三倍なり。等しく比較を示す數にはあれど、個人の「一」たると、人類の「一」たるとは趣を異にするが如し。即ち人類の「一」の中には、個人の「一」を幾千萬含むや測り知るべからず。神が唯一なるは人類のその如きものなりや、合理的解釋を重んずる學者は、動もすれば「然りと答へんとす。斯く考ふれば、何等神祕の點を残さず、父、子及び聖靈は各、三分の一神となる譯なり。吾等は之を首肯する能

はず。さらば吾等が信ずる「唯一」は如何。こは相對的世界に住する吾等の智識と餘りに懸隔せりと雖も、吾等は神を「唯一」と呼ぶ場合に於て、個人の「一」にもあらず、人類の「一」にもあらず、他の「一」と比較する單位としての「一」にあらず、絶對無限自足圓滿を意味するなり。是に何等の制限を加ふべからず。又何ものとも比較すべからず。絶對的靈的の此の「唯一」は超數理的なり。吾等は今一層明かに靈界を辨ふる日の至るまで「一」或は「三」の語を假用するに過ぎず。思うて茲に至れば、神祕世界が吾等の眼前に劈然たるを覺ゆ。

(四)三重説と聖書解釋。前にも既に述べたる如く、聖書の中には三重説に關する議論は之を見出すべからず。勿論此の用語とても未だ定まり居らざりしなり。然れども、其の信仰の事實は早くより現はれたりき。耶蘇は常に神を呼びて「我父」といひ、而して祈禱を斷たざりき。是れ人

類の模範たらん爲に力めて爲せるのみにて、實は誠意なき行動なりしや。否々、明かなる神子の自覺が自然に流露せるなり。また他の一面に於て、耶蘇は「父と我とは一なり」と告げ、自己の慈愛をもて神より出づとなし、進んでは弟子等の禮拜を受けたるが、是れ方便として力めて爲せるのみにて、實は誠意なき行動なりしや。否々、明かなる彼の自覺が自然に流露せるに外ならず。聖書を翻譯する者を困却せしむる耶蘇の意識中、此の二面の矛盾は、唯三重説に由りて解釋せらるべし。聖靈に關する記事を読みても、之を神自身と信じ、また内住の人格的存在と認むる時に、初めて解せらるべき多くの點あるを發見すべし。三重説は聖書解釋の鍵ともいふべきが。

## 第二節 信仰生活

## 一 信仰の動機及び目的

(一) 貫せる父子關係。一概に神人關係と言へど、宗教に由りて、千狀萬態なり。即ち野蠻時代の宗教に在りては、(イ) 仇敵關係なるもありて、神といへば恐ろしきもの、人に祟るものとせられたり、惡魔、疫病神、怨靈の類是れなり。斯かる宗教に在りて信仰は祟り除け、災禍祓ひの爲に必要なり。恐怖心は其の信仰の動機たり。(ロ) 神人間商賈取引關係の如きもあり。人は神の爲に或條件を満たし、其の報酬として富貴、延命、息災などの幸福を要求す。此の種の宗教に在りては、信仰は利己心より發するなり。(ハ) 神人間の關係は君と臣との如きもあり。信仰の動機如何といへば、恐怖心と利己心との混淆なり。神の權威に畏縮して、好まぬながら信仰生

活を營むものなれど、相當の恩賞を豫期するなり。

耶蘇は我等の父として神を示しぬ。即ち神と人とは父子關係なり。猶太的時代思想たりし君臣關係の混入せる爲め、聖書に傳へられたる耶蘇の教訓中にも純粹ならざる節あれども、最高根本思想は、神を父と信するにあるは明かなり。基督教とは如何なるものなるか。信仰の動機及び目的如何。人生々活の中心は何か。救ひの主動者は何か。救はれたる者は如何なる状態に變るや。天國とは如何。是等の諸問題は、父子關係を一貫すれば、總て明かにせらるゝなり。

(二) 信仰の動機。父子關係と見れば、神人關係は信仰生すると共に始まりたるにあらず。寧ろ生れながらなり。本來神は根にして我は葉なり。我れ神を造れるにあらず。神我れを生みたるなり。此の關係は、人の力も断たんとして断たるべきものにあらず。我が手我が足は或は之を我

より分つを得べし、而かも我は神より離るゝ能はざるなり。我が手我が足は、之を切り去れば、我以外に屬するを得む、而かも我は、到底神以外に屬するを得ざるなり。天は神の座位、地は其の足臺、而して微は一筋の頭髮に至るまで、悉く神の保護の中にあれば、我等は神の圏外に逃れ去るを得ず。神人關係は自然的にして永久的なりと謂ふべし。

父子關係を以て一貫せる神人間の關係は、單に自然的たるに止まらず、尙は道德的なり。神は愛子として人に慈愛を垂れ、人は慈父として神に孝情を竭し、二者互に愛を以て聯結さる。父子の場合に於て、父の愛は常に子の愛に先ち、而して完全に近し。子の未だ生れざるに當りて、父は養育の準備を怠らず。既に生るゝも、其の初に當りてや、動物と違ふ所なく、意思の疏通するなきも、父は子を受するなり。長じて孝養を盡すべき年齢に達し、幾度か不孝を重ね、家名を傷つけ、父の名譽を害ひ、郷里に住

み難きに及び、遂に出奔して行衛を晦ませる子に對しても、父の愛は減せざるなり。人生に於ける父子關係を通じて、吾等は善き者にも、悪しき者にも、雨を降らせ、日を照らせ、給へる無限なる父の慈愛を感じるなり。己を受する者を受するは、何の報酬かあらん、税吏も然、せざらんや、といふも、畢竟父なる神の慈愛に倣ふに外ならざるを知るなり。

父子關係より推せば、信仰は孝行なり。信仰の動機は孝行のそれに外ならず。孝行の動機中には、或は父の威力に對する恐怖心も混すべし。或は自己の將來に關する利己心も含むべし。而かも吾等より見れば、こは寧ろ弱點に屬す。健全なる孝行の動機は、感恩の情に基くを要す。此の情なくば、外見孝行に似たりとも、虚偽の行爲に過ぎじ。故に孝行を獎勵せんとせば、先づ父母の恩義を知らしむるに若かず。恩義を知らしむるには、親子間に於ける自然的觀察に、加ふるに道德的觀察を以てするに必

り。子を思ふ親心を知らしむるにあり。親心を想はざれば、身體髮膚之を父母に受くるとも、養育の手數と費用と如何に多くとも、感謝を値ひするものはあらず。

耶蘇基督此の世に來り、神の親心を示して遺憾なし。吾等は曾て神を恐ろしく感じたりしが、親心を偲びては、只管懐しくなり勝りぬ。久しき間、無心に世を送り來りしが、神の親心を通して自然界を觀れば、悉く是れ慈愛の標徴なりけり。高き天、廣き海、四時折り々々の眺めは固より、飲食衣服の末に至るまで、總て恩寵を示さぬものとは無し。更に進みて我が靈性に對する、神の親心を覺れば、從來愁嘆不滿の基なりし不幸災禍の中にも、神の慈愛の満てるを覺ゆ。

特に基督の貴き犠牲に由りて、罪に汚れたる我等が功績なくして救ひ出され、父の家庭に歸るを得るは、何たる深き慈愛ぞや。自己の靈性を

輕んじ、道德上の責任を無視する者に取りては、十字架上の基督は無意味ならん。恰も病症を自覺せざる人、實は不治の病に罹れりとも、取りては、醫師は不生産的にして且つ無用の長物なるが如し。而かも一たび思ひ掛けなくも、自己の生命が瀕死の状態にあるを覺らば如何あるべき。彼の力、彼の頼りは、唯醫者にあらずや。靈性の尊嚴と道德上の責任を自覺し、あゝ我れ惱める人なる哉。と懊惱する人に取りて、基督は生命なり。希望なり。また唯一の力なり。吾等は十字架上の基督を通して、父の慈愛の無限なるを學ぶなり。

我等の境遇は一様ならず。貧富貴賤老幼男女の別あり。順境に樂しめるもあれば、逆境に悲しめるもあり。健なるもあれば、病めるもあるなり。されど、基督で慈愛の鏡面に映して眺むれば、如何なる境遇にあるとも、其の中に父の慈愛含まるゝを發見すべし。之と共に、失望は希望に、悲嘆

は喜悅に變るべし。斯くて父なる神に對し、孝情勃然として裏に發すべ  
きなり。耶蘇の救拯は、孝情の挑發なり。子心の覺醒なり。

信仰心は子心なり。信仰は孝行なり。發動の原因は、親心を解し初むる  
にあり。即ち曰く、信仰の動機は感恩の情。

(三)信仰の目的。人動もすれば問うて曰く、信仰の利益如何と。疫病祓  
ひ、家業繁昌などの利益を目的として、宗教を利用するに慣れたる人に  
取りては已むを得ざる疑問なれども、さりとは餘りに情なし。多少宗教  
を解する學者ですら、品性修養、或は安心立命の爲に必要なりとて信仰  
を鼓吹する者あり。若し彼等に向つて「信仰の目的如何」と問はば、品性修  
養の爲め、又は「安心立命の爲め」と應ふべし。然れども、父子關係の經驗に  
由れば、名は美なれども、自己中心を離れざる「修養」「安心」は、信仰の目的と  
して許さるべからず。孝行を旨とする者は、自己の平安、名譽、或は利益を

念頭に置くことなく、一に唯父の心を爲すに力むべきなり。信仰は天地萬有の主宰者なる我等の父に對する孝行なり。無限無窮  
の慈愛の御手に我は抱かれたるを覺りては、感恩の情禁ずる能はざる  
より、我が信仰は生れたるなり。されば神以外の何物をも其の中に含ま  
ず。我は唯「心」を盡し、精神を盡し、意<sup>こころ</sup>を盡し、力を盡して、我が神を愛すべき  
なり。我は基督の犠牲に由り、自ら價値なき者ながら、此の儘救はれて父  
の家庭に呼び戻されぬ。されば我救ひには何等缺くる所なし。我は此の  
上修養鍛鍊を要せざるなり。我が靈性に關して何等の顧慮を煩はずに  
及ばざるなり。若し力めて難行苦行し、修養工夫し、善に勵みて功德を積  
まんとするが如きあらば、基督の犠牲に對する不満足を示すものにて、  
此の上の不信仰あるべからず。されば吾等は自己の爲に何事をも爲す  
を要せず。唯々神の榮光の爲に善行を勵むべきなり。神の慈愛を感得す

る權を受けたる吾等は、其の慈愛を實行の間に隣人に向つて現はさるべからず、是れ我等の貴き義務なり。我等の利益の爲にあらで、神の榮光の爲なり。吾等が廻はらぬ舌もて神の慈愛を吾等の友人に語らんとする時、如何に神は喜び給ふべきぞ。

上路加傳第十五章に記されたる蕩兒の兄は、我多年爾に仕へて未だ爾の命に背かずと曰へるほどに、正義の士なりき。然れども惜しい哉。彼の正義は地に着けり、彼は父の心を爲さずして己が心をなせり。彼の正義は裏に愛情なき規則に過ぎざりき。故に彼は季弟の惡むべきを知りて、再會の喜びを感せずしなり。彼は爾の弟死にて復活し、失ひて復得たるが故に、我等喜びて樂しむは當然のことなり」と前後を忘却せる父と共に喜ぶ能はで、却つて父の慈愛を不當然となし、不平滿々たりき。

自己中心を離れざる限り、正義も信仰も、未だ不朽の生命に觸れざる

なり。神の喜びを喜び、神の悲しみを悲しみ、只管神の旨に従はんとする信仰の目的は茲にあるなり。

## 二 信仰生活要義

(一) アルファにしてオメガ、信仰生活に於ては神にアルファにして又オメガなり。初にして終なり。否々、神は一切なり。行爲の動機は神に出で、其の目的は神に向ふ。何故に吾等は人を愛すべきや。我に親切なる人を愛するは、其の親切に報ゆるものとも思はるべけれど、我に親切ならざる人、又我を惡む人に向つても、尙ほ敬愛の道を盡すべくば、愛の原因は他にあらざるべからず。宜なる哉。耶蘇が愛敵の教を垂るゝに當りて「父の完きが如く」と神の愛を標準とせること、何故に耶蘇は無限の慈愛を人類に示せしぞや。人類が無限に彼を愛せしが故にあらざりき。否、反對に人類は彼を惡みたり、而かも彼は益々人類を愛せり。彼の愛が無盡藏



なりしは、製造元の豊かなりしに由る。製造元は即ち神なりき。然り、彼の慈愛は神より出でたり。人の愛は盡くること屢なれども、神の慈愛は窮まりなし。耶蘇の慈愛は其の儘神の有なりしが故に盡くること無し。我は葡萄樹、爾等は其の枝なり。吾等も亦耶蘇に頼りて、愛の生命を受けつゝあり。吾等の愛も亦無盡藏なる神の倉庫より出でたるものならざるべからず。況んや吾等の愛は彼の愛に準據すべしとて、我れ爾等を愛する如く、爾等互に愛すべしと諭されしをや。

親子、兄弟、夫婦、朋友間に於てすら、吾等の愛は動もすれば盡きんとす。されど、吾等は愛の源泉を神に求むるに至れば、君君ならずとも、臣の道を盡し、夫夫たらずとも、能く妻の道を盡すべきなり。神の無限の慈愛と神の前に於ける我が罪とを想ふ時、我は我が敵をも惡み能はず。況んや我が親しき者をや。

吾等の愛は神より出でたるのみならず、亦神に向つて歸らざるべからず。神を愛するてふ心にて人を愛せざるべからず。馬可傳第十二章に記さるゝ學者と耶蘇との問答を見るに、學者耶蘇に問うて曰く、總ての誠律中、何れ首なるか。耶蘇答へて曰く、主なる吾等の神は即ち一ツなり。爾心を盡し、精神を盡し、意を盡し、力を盡し、主なる爾の神を愛すべし。是れ誠律の首なり。愛神の道を彼は第一とせり。而して第二は如何と見るに、第二も亦之に同じの冒頭の下に、己の如く爾の隣を愛すべし。之より大なる誠律無し。と宣しぬ。略言すれば、第一愛神、第二愛人なるが、第二は第一より離れたるに非ず。詮する所、愛人の道は愛神に歸するなり。馬太傳第二十五章三十節以下に未來審判の比喻あり。善人に向つて賞する理由を述べて審判者の曰く、爾等我が飢ゑし時我に食はせ、渴きし時我に飲ませ、旅せし時我を宿らせ、裸なりし時我に着せ、病みし時我を見舞

ひ獄に在りし時我に來ればなり。善人等は曾て然ることの無かりし由を答ふれば、我誠に爾曹に告ぐ、既に爾等我が此の兄弟の最も小さき者に對する行爲は、神に對する行爲に外ならざるを、  
 姑よ、嫁を愛すると思ふ勿れ、嫁よ、姑に仕ふると思ふ勿れ、富者よ、貧民を輕しむる勿れ、貧民よ、富者を恨む勿れ、位高き人よ、智慧ある人よ、人間の中に於て最も價値無き憫れなる人を侮る勿れ、其れ等の行爲は總て神に歸するものなればなり、神に仕ふる心もて人に盡せ、諸君よ、相手を神に仕ふる心もて愛する時、何者か諸君に敵し得べきぞや、而して是れ實に神を父と信する信仰と合へり、神若し父ならば、吾等は總て兄弟、神は其の中の一人をも憎み給はざればなり、  
 (二)養ふべき良習慣、前にも既に述べたる如く、子供たる吾等は、唯父

の慈愛によりて救はるるものにて、何等の條件あるなし、耶穌基督に於ける神の啓示を仰ぎ見む者、誰か能く之を疑はんや、吾等は唯基督に信頼し、感謝報恩の生涯に入るなり、さばれ如何にして完き感謝報恩の生活を營むべきや、不信仰生活に慣れたる吾等は、動もすれば、最も忌むべき忘恩者たらんとす、基督に信頼すべき筈なるに、さばせで、唯放任せんとす、夫れ信頼は感謝を生み、放任は忘恩を生むなり、而して日常の習慣は、善にもあれ、惡にもあれ、不可抗的惰力となりて吾等を支配すること頗る大なるものあれば、茲に感謝報恩の生涯に於て特に注意すべき二  
 三點を擧ぐべし、  
 (イ)祈禱、吾等思ふに、祈禱は人情の自然なり、高山幽谷に行き、莊嚴の氣に打たる時、神社佛閣に詣て、何となく頭を下る時、吾等は祈禱したるなり、感興極まり恍惚として我を忘るゝ時、慈歎やる瀬なく、人力徒に

盡きたる時、吾等は常に祈禱したるなり。紀貫之が物せる古今集の序文に見るに、我國の和歌は一種の祈禱なり。作歌者の靈の琴線が天地神明に交感して眞の名歌は成る。偶像禮拜は一種の祈禱なり。路傍の地藏尊の前に跪坐して合掌せる老媪の靈は、何物にか觸れたる心地せずや。念佛題目は祈禱の一種なり。特に奇しきは、佛教の經典が祈禱の用に供せらるることなり。經典といへばとて固より一概には論ずべからざれども、其の内容よりすれば、勿論これ祈禱にあらず。多くは哲學上の議論、若くは信仰上の教派なるべし。而かも僧侶が之を讀誦するや、聽衆を背にし佛壇に向ふ、吳音の棒讀みにては、讀者にも聽衆にも、其の意義は解せられまじきが、心情より推せば、彼等は祈禱せるなり。

祈禱は人情の自然なり。明かに神を信せざる者に在りても、以上述べたる如く、祈禱の萌芽はあり。人生到底祈禱無かるべからざるなり。況む

て、基督者は天地萬有の主宰者を我等の父と信するものなり。祈禱なくして可ならんや。初對面にて、未だ互に打解けざる二人、一室に居るは誠に窮屈なるものなり。彼一語我一語、言葉は續かず、雙方共に何を話さんかと苦慮慘憺たり。然れども、親しき問柄ならんには、話は盡きず、時の足らざるを覺ゆべし。我れ會て久し振りに我が實兄に邂逅し、眠むたかるべき夏の夜、蚊帳内に臥しながら語り明かせしことあり。何を話せしやは記憶せざれど、快感は今に忘れず、親しき友と語り明かせしことも珍らしからず。斯かる經驗は誰にもあることならんが、基督者の祈禱は此の如き喜びを以て神と語ることなり。必要といはんよりは、寧ろ人情自然の發露といはんか。

基督者が冥なる神と交通するもの、即ち祈禱なれば、祈禱は窮屈なるべからず、寧ろ喜ばむかるべし。吾等は之を米國の大説教家ヘンリー・ワ

アト・ピイチアキの逸話中に見る彼の僕に篤信正直なる士人ありき。毎夜就寝前の祈禱の時、左も喜びに堪へざる體にて、大聲を發して笑ふが常なりき。ピイチアキ一語りて理由を問へば、僕の曰く、一日の業務を了へて父の前に跪坐し、靜に恩寵の窮まりなきを思へば、喜悅の情禁じ能はざるなりと。祈禱は爾く喜ばしかるべき經驗なり。朝に夕に、坐しつ、行きつ、或は感じ、或は念じ、祈禱の生涯を送るは樂しからずや。

父なる神は吾等の祈禱を聽きて喜び給ふべし。此の世の父母が其の子の言葉を聽きて喜ぶを見ずや。彼等は年長けたる子女の巧みなる挨拶よりは、寧ろ「カアサン」の代りに「タアン」と呼ぶ聲を喜ぶべし。父なる神は祈禱を俟つて吾等を知り給はざるべけれども、御心に明かなること。も子供の告白を聽きて喜び給ふべきなり。故に祈禱には何等隠す所なく、極めて思ひの儘を表白するを要す。此の世の父母が最も厭ふ所は子

女の過失にはあらで、隱匿痛心なるべし。

祈禱の根柢は信頼心にあり。菅原道真の作歌に擬せられたる、心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとも神や護らん」の古歌中、神や護らん」と信する所に祈禱の基礎はあるなり。故に吾等より見れば、彼の古歌は一種の祈禱なり。詩篇第三篇の著者歌うて曰く、我れ臥して寝ね、眼醒めたり、エホバ我を支へ給へばなり。著者を普通に信せらるゝ如く、タビデなりとせば、彼は王者の身にてありながら、其の子に背かれ、難を避けて落莫せるなり。而かも眼醒めて神恩の宏大なるを謝すること。此の如し。信頼より生ずる祈禱は、第一に感謝と讚美となり。我救はれたる爲に謝し、神徳の無窮なるを稱ふべきなり。

信頼を根柢とせる祈禱は、自己中心にてあるべからず。飽くまでも柔順なるべし。思ひの儘を打明けて、此の杯を我より取り給ふと祈るは可

なれども、されど我心を爲さんとするに非ず、御心に任せ給へ」との柔順を缺ぐ可からず。我神、我神、何を我を捨て給ふや」と煩悶する場合はありとも、遂には「我靈魂を爾の手に託す」との服従に終らざるべからず。パウロは人の忌むべき痼疾を有せり。彼三度そを醫されんことを祈りたるに、彼は其の病が神の恩寵なるを見出せり。美はしき子供心は兩親に柔順なるにあり、基督者の祈禱には此の子供心を失ふべからざるなり。茲に注意すべきは柔順と斷念との別なりとす。斷念の中には希望なく、寧ろ斷念それ自身に於て絶望なるが、柔順の中には希望あり。我は其の全體を解し能はざるほどに、大なる希望を含むなり。

祈禱には勿論願望を含む。信頼、柔順は美はしき子供心にはあれど、子供も體力精神發達するに至れば、何時までも膝に上り乳房を銜へて居らんや。彼は自ら歩み、自ら遊び、而して遂に自ら父母の爲に働くを喜ば

ん。而して彼の自由が擴張せらるゝに従ひ、願望の精神亦盛なるべし。父母は寧ろ其の子の正しき願望を聽きて喜ぶべきなり。神を父と仰ぎ、何等隔意なき基督者の祈禱には熱烈なる願望無かるべからず。御名を崇めさせ給へ、御國を來らせ給へ、御心の天に成る如く地にも成させ給へと神の爲に祈る時、神の使者と相撲ひせしと傳へらるゝヤコブの如く熱心にして執拗なるべし。十年、二十年にて斷念すべからず。此の世の父母の經驗に徴するに、其の子女の信頼、柔順は固より喜ぶ所なるべきも、忍耐力乏しく、事をなすに意氣地なからんには、甚だ悲しく思ふなるべし。

行住坐臥、常に祈禱の精神を支持するは善けれども、亦朝夕其の他、時を定めて祈禱するは善きことなり。此の如く祈禱を日課の中に加へて、之を實行するは、信仰生活上良習慣たるを妨げず、習慣とし云へば厭は

七く思ふ者あれども、良習慣を思ひべからず、生命なく形式に流るるを  
 慎むべきのみ。  
 (口)讀書。古今相隔つる幾千年、東西相離るる幾千里、而かも讀書に由  
 りて吾等は其の聲を聞き、其の經驗を受けて我が有となすを得、遠く傳  
 へられ永く生命ある書は、比較的用意されたるものなれば、従つて有益  
 なり、況んや其の著者の人格崇高なるに於てをや、吾等の智識は必ずし  
 も書籍より來らず、日常交際の間を得る所少からざるなり、然れども、眼  
 に一丁字なき人は、智識の程度甚だ低さを免れざるは何故ぞや、是れ人  
 格劣等なる者の不用意の言行、其の最も著しきは井戸端會議に現は  
 れたり、一に由りて養はれたる故ならざらんや、中江藤樹先生の郷黨に  
 於ける感化著大、一小民と雖も君子の道を踏みきと傳へらる、彼等は一  
 丁字なくとも大學者たるを妨げじ、サマリヤの一賤婦は、井戸端に於て

耶蘇に邂逅し、永生の要道を會得せり、されば君子聖人は世に多からず、  
 吾等が日常耳にする所は淫聲惡言に滿つ、吾等は不自由ながらも、古今  
 東西に涉りて我が師を求めざるべからず、是に於てか、讀書の要あり、而  
 かも讀書に由りて得んとする智識は、其の有益なるだけ難解を免れず、  
 一書を解し、批判し、而して我が有となすは、決して容易の業に非ざるな  
 り、是に於てか、吾等は解すると解せざるとに關せず、必ず一定の時間  
 に讀むといふ習慣を養ふべき必要あり、讀書の結果もさることながら、讀  
 書それ自身を楽しむことを學ばざるべからず。

特に基督者は聖書に親しみ、之を手にするに、恰も敬愛せる師友よ  
 り受けたる手翰を開く思ひあるを要す、縦しや内容に難解の點ありと  
 も、我が爲に書かれたるものと信するときは、倦まぬものなり、倦まずし  
 て毎日々々讀む中には、如何に教育なき者と雖も、自己の靈性に必要な

る滋養を味ひ得るに至るべし。

一概に聖書といへば、舊約全書あり、新約全書あり。舊約は、耶蘇以前のものにて、中に傳説あり、詩歌あり、法律あり、教訓あり。新約は、耶蘇言行録四種、初代教會の發達史、及び書翰等より成る。其の内容より見れば、聖書は之を一書籍といはんよりは、寧ろ叢書、若しくは雜集など謂はん方當れり。是を以て讀みて單調ならず、味ひて趣味愈、深し。斯くも雜駁なるが中に、全集の一致する所あり、大路小路の何れも羅馬に通はぬは無かりし如く、聖書の文書は、悉く神の慈愛を示さん爲に書かれたり。傳説は史料として物せられず、詩歌は文藝の爲に歌はれず、書籍も日常用便を目的とせず、悉く舉げて信仰を説けり。夫れ信仰は普遍的にして萬人に通ず。聖書を讀みて、思ひ掛けなく、自己を其の中に發見するは之が爲なり。我に宛て、送られたる書翰の様に感ずるもそれが爲なり。

神の啓示は耶蘇基督に其の頂點を現はせり。されば聖書中に於て、新約全書を以て最も重しとすべし。舊約全書は唯準備として、段階として必要なり。こは畢竟豫備校に過ぎず、端艇に外ならず。歴史的研究上、舊約全書は必要なれど、基督を信する爲には敢て之なくとも妨げじ。然れども、舊約全書は趣味豊かなる文集なり。其の傳説の中に吾等が信仰的經驗は具體的に現はれて、アブラハムとなり、イサクとなり、ヨセフ、ヤコブとなれり。埃及に於ける奴隸の生活、偉人モウセの苦心、曠野の旅行、さては、バビロニヤ、アッシリヤの災禍に至るまで、何れか心靈上の經驗を語らざる。

如何に多忙なる人と雖も、毎日半時間以内聖書を讀むに費さば、得る所は時間の損失を補ひて餘りあるべし。故に各、携帶に便なる小形聖書を衣囊に入れ置き、停車場などにて空費すべき時間に之を翻讀するに

力むべし。智識上、一時に得る所なくとも、此の良習慣を養はゞ、遂には大に得る所あるに至るべきなり。

(ハ)瞑想。「靈のことを思ふは靈なり、生命なり、神の愛の種子が生えて、豊かに實るべき畑地は、昨日聽きて今日忘却するが如きものにあらざるべし。彼や必ず思慮深き者たらざるべからざるなり。さらば、如何にして思慮深き者たるべきや、瞑想の習慣を養ふべし。吾等が所謂瞑想は、無私の境に入るといふが如き神秘的ならず、寧ろ甚だ平凡なり。曾て聽きしこと、讀みしもの、及び今日に至るまで我を包みたりし恩寵の經驗を、腦中にて繰返すことなり。翻芻動物類が、一たび食したるものを再び咀嚼する如く、靈的食物を味ふことなり。先づは腦中の蟲干か。

瞑想の習慣なき人の信仰は、淺薄なるを免れず、而かも瞑想の人の陥り易きは懷疑の陥穽なり。懷疑は一層高き、新らしき信仰に進むの段階

たること多ければ、強ちに忌むべからずと雖も、足留まり無き懷疑に陥らば、遂に再び起ち難かるべし。如何なるが足留まりなき懷疑ぞといふに、全く實驗を離れたるものは是れなり。健全なる懷疑は、常に實驗に基くものなるべし。人智の制限を忘却して空想の人となり了りて、危険なる懷疑には陥るなり。

相對界の住者たる吾等の智識に由れば、事物の觀察には必ず兩面あり。表裏若くば明暗是れなり。此の場合に於て、吾等は力めて裏面を棄て、暗黒面を去り、表面につき、光明の側面を取らざるべからず。

(三)家庭禮拜。人動もすれば基督者が神を人類の父と仰ぎ、人類を凡て兄弟なりと信するを非難して、家庭に冷淡なりとなす。是れ大に誤れりと謂はざるべからず。夫れ他人を愛するといふは、家人を惡むの意に非ざるなり。他人ですら兄弟と信する基督者が、家庭に冷淡なるを得べ



きか。論より證據、基督者の家庭は比較的平和なるを見よ。肉に於ても亦靈に於ても一家なる基督者は、特に親密にして隔意なかるべきは言ふを俟たず。

隔意なき一家が、朝或は夕に時を定め、一同に父なる神を禮拜するは美はしき習慣ならずや。吾等は家庭禮拜の風習の一層盛ならんを望む者なり。

(ホ)教會の集會に出席すること。信仰生活に入りたる後、三四年が中に、教會の集會に力めて出席するの習慣を養ふこと切要なり。一二年経過して最初の熱心漸くに冷え初め、倦厭の念萌さんとする時、特に忍耐して怠慢心に打勝たば、吾等は其の時一の基礎を築きたるなり。人には各、缺點短所あり、深く交るに従ひて厭はしく感ずること多からむ。而かも我にも他の人より見れば同様の缺點短所あるを覺らば、互に忍ばさ

るべからず。況んや聖き神の面前に於て、我と彼と幾程の差あるべき。教會を我が家庭となすに至るまで、吾等は教會に親しむことを學ぶべきなり。然らずむば吾等の信仰は空に歸せむ。未だ眼に見ゆる人を愛せずして、眼に見えざる神を愛すること能はざればなり。

### 三 天國

天國或は神の國の意義如何。其の現在生活との關係は如何。

(一)出世間的意義。氣候國狀などより現世を悲觀するに至りしか。印度の宗教は極めて出世間的なりき。我國人從來其の影響を受けたること大なりしが故に、宗教といへば、現在生活に何等關係なき隱居連の與かるもの、極樂とは圓頂黒衣の佛菩薩が蓮花の臺に禪坐せる所、かの様に想ひたりき。道に志すことを出家遁世と呼びて怪しまざりき。入道としいへば、當然僧體を意味するに至りたりき。

此の如き思想の中に生れ、斯かる信仰的空氣を呼吸して成長したる吾等は、基督教に所謂天國若しくは神の國を想ふにつけても、尙ほ出世的間的意義を脱し能はざるの憂ひあり。

(二)現世的意義　猶太の天國觀は極めて現世的なりき。彼等は民族の守護神として神を信じたりき。故に生ける歴史の上に神を觀たり。埃及の壓迫を免れたるは、神の祐助に由るとせられたりき。饑ゑし時の食、渴きし折の水、迷ひし時の道案内など、總て神の力と信せられたりき。彼等が數度の戦争に勝利を得て、遂に目的の地に達したるは、全く神の祐助に由ると思はれたりき。モウセの律法は、彼等に取りては神の律法なりき。豫言者の訓誡は、彼等に取りては神の聲なりき。ダビデ及びソロモンなどの王者は、神の代表者なりき。神は彼等の王にして、彼等は其の民、彼等の國は其の儘神の國、即ち天國たりしなり。如何に我國に於ける神道

と近似せるかを見よ。元寇の亂に、暴風起りて敵艦を粉碎せるを、伊勢の神風の力に歸したる、全然是れ猶太的なりき。

猶太人等の信じたる現世的神國觀は、數度の敗衄に由りて蹉躓を來さざるを得ざりき。バビロニヤに捕へられ、アッシリヤに幽囚せられたるがら、彼等とても其の儘、それを神の國とは信じ能はざりしなり。彼等の神國觀は、時間的に於ては未來の希望と變りぬ。而かも空間的に於ては、尙ほ現世的國家的なりき。即ちダビデ、ソロモンの昔時に勝る王國の出現こそは、彼等に取りて天國の顯現なりしなれ。

(三)靈的意義　耶蘇の示せる天國は靈的のものなりき。此處にあり、彼處にありと現はれて來るものにあらず。吾等の裏にあるものなりき。靈と眞とを以て父を拜する者は、既に天國の住者に外ならざりき。過去より現在に亘りて受けたる限りなき神の慈愛を感じ、神子の自覺湧き出

づる時、吾等は神の國の戸籍に登録せられたるなり。

靈的天國は未來に關係す。耶蘇の教訓中に未來に關するもの少からず。而かも其の未來たるや、現世に關係なきものに非ず。個人としても、全體としても、現世の發展し延長せるものなりき。耶蘇が「天國は芥子種の如し。人之を取りて畑に蒔けば、萬づの種よりは小さけれども、長ちては他の草より大にして、空の鳥來り其の枝に宿るほどの樹となるなり。」(馬太十三)と語れるを聽けば、天國は一定不變の靜體にはあらで、生氣溢れ、常に發展して止まざるものと見ゆ。

靈的天國は現在に關係す。耶蘇が十字架の刑に處せられたる時、共に同刑に處せられたる者二人ありき。元より彼等は比類稀なる惡黨なりき。而かも其の一人は耶蘇を仰ぎて懺悔の念禁じ難く、主よ御國に來らん時、我を憶ひ給へ」と請ひぬ。現在の苦痛は、爲せしことの報いなれば

當然なれど、責めて未來世の苦患を免ればやと、普通人ならずと耶蘇を識りて斯くは願ひしなり。彼の天國は未來に屬せり。然るに、耶蘇は答へて何と曰ひしぞ。今日爾我れと共に樂園に在るべし。耶蘇の天國は現在に始まりしなり。耶蘇を信じて彼に救を求むる時、既に吾等は救はれたるなり。我れ如何に惡人なりしとも、打續く不幸に惱める者なりとも、我が肉體は今瀕死の状態にあるとも、救主耶蘇に信頼する時、ア、其の刹那、我が靈は樂園に在るなり。外見は如何に苦しかるとも、悲しかるとも、心は平和、喜悅、希望に満たさるゝなり。

印度に發達せる出世的天國は、寺院的にして人情を無視せり。猶太に起れる現世的天國は、國家的にして律法を中心とせり。我が國俗間に信ぜらるゝ所には、雙方ともに含まるゝが如し。即ち一方に於ては極樂てふ語に由りて表はさるゝ如く、全く人情に遠き寺院なるが、他の一面は

地獄の語に表はさるゝ如く、裁判所、若しくは監獄署に相等しく、法律に基く懲戒場なり。地獄と天國とは、其の意同一ならねども、其の未來觀たる點に於て互に相通する節なきにあらず。

天地萬有の主宰者の恩寵を會得し、彼を我等の父と呼ぶ基督者の天國は、寺院に非ず、又國家にも非ず。寺院の如く人情を沒却せず、國家の如く法律中心に非ざるなり。我等の父の語及び耶蘇の意識に由りて明かにせられたる如く、天國は全然是れ家庭なり。神を中心として、神の子等が嬉戯し、又勞作する家庭の團欒なり。強き者が弱き者に使はれ、善き者が惡しき者の爲に泣く、家庭の外に斯かる美はしき犠牲を吾等何處に見んや。天國の如何なるかを知らんとせば、吾等の家庭を見よ。茲に天國の雛形はあるなり。基督を信じて神を父と仰ぐ吾等は、神の家庭に加へられ、法律に由らで、慈愛に由りて支配さるゝに至れるなり。

聖書の中に猶太思想の混入せる爲に、國家的、律法的意義ありて、往々吾等を惑はしむ。然れども、耶蘇の最高根本思想は神を父とするにありたれば、天國は家庭たらざるを得ざるなり。是れ實に父子關係を一貫せるより起れる當然の信仰なり。

要するに、信仰生活は、父なる神の前に於ける家庭團欒の生活に外ならず。其の發展は敬神愛人の發展なり。其の喜悅は相愛の喜悅なり。其の満足は父に信頼するより起る。而して其の希望は繋りて神の裏にあるなり。

### 第三節 教會

吾等は前節に於て天國の模型は之を家庭の中に發見さるといひき。

然り、家庭は自然に小天國を形作り、とも謂はるべし。然れども家族相互の關係には、靈的ならざるもの、混合するが故に、信仰を中心とせずとも、家庭の成立を妨げず、家庭を以て天國の小模型と見るは可なれども、必ずしも各家庭直接に天國と關係せざるなり。然るに、茲に裏にある無形の天國が、外に現はれて、形を成し、信仰を中心として結ばれたる圓隊あり、教會は即ち是れ。

### 一 教會の由來

(一) 教會の創立。凡そ事の成るや、形體に現はれたる日に成れるに非ず。教會の創立を使徒行傳第二章に記されたるペンテコステの祝日に歸するは當らざるが如し。然れども、基督教會は耶蘇基督を中心として起り、彼に依りて維持せられ、發展せられたり。耶蘇なくしては世に基督教會は起らざりしなり。耶蘇凡そ三十歳にして初めて公生涯に入り、神

國の福音を説くや、數名の弟子等彼に従ひぬ。茲に耶蘇基督あり、而して彼に信頼せる弟子等あり、基督教會の名稱なくとも、創立發表式は執行されずとも、而かも教會の實は既に成りたるなり。

弟子等の信仰は極めて幼稚なりき。嘗に幼稚なりしのみならず、誤謬をさへ含みたりき。彼等は久しき間、猶太的天國、即ち現世王國を夢みたりき。露骨にいへば、彼等は猶太の愛國者にして革命家なりき。彼等の精神より見れば、教會は政治的結社を隔つること幾何なりけむ。彼等は從來の猶太思想を殆ど其の儘に有しながら、耶蘇に従へり。故に、彼等は耶蘇の在世中、彼を解し能はざりき。彼等は耶蘇を基督と信せし時、猶太の國王として考へたりしなり。基督即ち國王の信仰普及し、此の信仰に投せんとしたればこそ、馬太傳及び路加傳の著者が系圖を引きて、耶蘇をダビデ王の血統とはしたるなれ。今日より見れば、有りて益なく無くて

損なき骨折なり。然れども、時代思想の捕虜たること、誰人か善く之を免れんや。吾等とても現代の感化を脱する能はず、後世より見れば、噴飯に値ひすべきこともありぬべきか。

ペテロ、アンデレ、ヨハネ、ヤコブ、ピリポ、其の他の面々は、時代思想其の儘に耶蘇を信じたれば、耶蘇の眞意を解せざりき、而かも彼等は個人的に耶蘇に接觸せり、理解せぬながらも相愛の關係結ばれたり。茲に教會の基礎は築かれたりき。耶蘇に親炙せる彼等は、遂に耶蘇に同化さるべかりしなり。

(二)猶太に於ける迫害と其の結果。 露+六〇〇 聖書の方程式は、永久に互りて心靈上の眞理たるを失はず、誰人も災害は之を避けんとし、苦痛は之を免れんとする所、是れ實に凡てもの人情にはあれど、災害苦痛に鍛はるゝことなくして、心靈上の進歩を見むこと、殆ど難しと謂はざる

べからず、宜なる哉、教會發展史の他面は、其の苦悶史なること。

初代教會が嘗めたる苦<sup>辛</sup>き經驗に關しては、吾等既に神觀の發展を見むために之を略述せるを以て、今茲には省略するを便とせむ、而かも吾等は其の眞意を會得せん爲に、同情の力もて身を彼等の位置に置き、少時彼等と爲りて再考するを要す。彼等の眼中には最初猶太ありて他國なかりしなり。彼等の宗教心は愛國心―而かも甚だ偏狹なる―に外ならざりき。彼等は一意専心、自國の繁榮と同胞の幸福とを願ひたりき。然るに思ひきや、歡び迎ふるべかりし同胞の中に、彼等の生命を奪はんとする反抗者起らんとは、己を救はんとする者を害せんとせし例は、彼等之をモウセに於ても見たりき。耶蘇の教訓を受け、其の生活と死とに由りて、多少犠牲の貴き所以を覺り、迫害の幸福を感じたる彼等は、忍びて同胞に惡まれたりき。然れども、彼等が最後までも忍びて待ちたりし

希望は、紀元七十年、首都エルサレムの陥落に由りて全然水泡に歸したり。神の選民と誇りける同胞は、四方に散亂し、犬と卑下せる異教徒の旗印刷翻と聖所に翻へるを目撃せる時、愛國的宗教者の心は如何ありけむ。

此の大打撃を受け、彼等の一部は靈的信仰の曙光を認むるに至れり。彼等の神は一國一人に偏頗ならず、萬國萬人の神なるを覺り、耶蘇基督の父にして、又萬人の父なることを了解しぬ。大苦悶を経て基督の精神、漸くにして彼等に現はれ、世界的基督教會は、生命にかゝる難産の子として生れ出でたり。此の難關を通過し能はざりける者の中、或は絶望に陥りて亡びたるもあり、或は半ば猶太教、半ば基督教といふべきほどの信仰を従來の儘に維持せるものもありしが、二三世紀以後に至りて全く片影をも留めずなりぬ。

(三)羅馬の迫害と其の結果。「我れ平和を世に出ださん爲に來れりと思ふ勿れ、平和を出ださん爲にあらす、及を出さんが爲なり」と善くも耶蘇は示せしものかな。基督教は生命の宗教なれば、之を二分或は三分すべからず。取長補短用に供せらるゝ時、其の本領は既に滅却されたるなり。生命の宗教は、自ら本領を失はざる限り、運用自在なれども、壓迫の爲に折衷妥協さるべきものに非ず。此の生命の宗教に觸るゝものは、決して従前の儘にてあるべからず。個人は悔い、社會は改まらざるを得ざるなり。而して個人悔いんとするや、先づ煩悶生じ、社會改まらんとするや先づ迫害起る。

猶太に於ける打撃に由りて、信仰に於て世界的となりたる基督教は、事實に於て世界的宗教たらんが爲に羅馬人に傳へられたり。而して第一世紀の後半、放縱度なき皇帝ネロの爲に早くも危険視さるゝに至り

迫害は隠密の間に初まりぬ。それより紀元三百十二年に至る。殆ど二百五十年間、—中間に於て間斷はありたれども—に於て死刑に處せられたる者數知れず。初に當りては、打つけに宗教を迫害せず。放火竊盜など、あられも無き罪名を負はしめたりしが、後に至り基督者てふ名稱は重刑に値ひするものと思はるゝに至れり。スムルナの監督ポリカアブは、八十六歳の高齢を以て殺され、アンテオケの老監督イグナチウスも、羅馬に於て猛獸の餌食となりぬ。ペテロ或はパウロの如き先達が十字架上に肉を裂きたるは言はずもあれ。前途有望なる少年、花恥かしき妙齡の少女、さては東西を辨へざるあどけ無き幼兒に至るまで、或は十字架上に惨殺せられ、或は野獸に食はれ、或は生きながら松火代りに燃さるるなど、今日の人情よりすれば、想像し難きほど無慙なる待遇を受けたりき。

されど、羅馬政府が根絶せんとせる計畫は水泡に歸したり。生命の宗教たる基督教は、人爲的壓迫に由りて如何とも爲し難きを示したり。迫害の爲に教會内部は却つて洗滌せられ、如何はしき曖昧信者は其の影を隠し、團結一致の精神愈々鞏固になり、教會の組織政治、一に統一を主とするに至れり。迫害の事實に由りて、信徒は犠牲の貴きを覺り、我が爲に人爾等を罵り又迫害し、偽りて様々の惡しきことを言はん。其時は爾等幸福なるかな、喜び樂め天に於て爾等の報酬大ければなり。馬太傳五の十二の教訓の眞味を味ひたり。耶蘇の爲に殺さるゝを喜ぶの風、年と共に募り、特に十字架に死するを此上なき光榮となすに至りぬ。封建の世、武士が其の祖先の戦功を誇りし如く、否、それにも勝りて、殉教者は親戚知友間に於ける讚歎の中心たりき。

斯かりければ迫害益、加はるに従ひ、信仰の火愈々盛んに燃ゆるに至り



ぬ。正に是れ石油火事に水注げる類、迫害者とても吾等と同情の人なり、殘忍酷薄は其の本性に非ず、争で基督者の熱心に感激せざるべきぞ。生命を賭したる基督者の信仰に打たれては、冷酷なる迫害者も、己が心の正義に渴き、信仰に飢ゑたるを見出しぬ。斯くて一人死して、五十人或は百人、新たに増加せり。宛然一粒の麥、地に落ちて死し、多くの果を結べるものなり。

基督教に對する迫害は、思想上の方面にも起りたりき。多數の學者は、書を著はして嘲笑を事としぬ。アレキサンドリヤの新プラトニアンの中より、其の哲學を橋梁となして、基督教に加はりし者もありつれど、末派の街學者流は、只管非難攻撃を事としぬ。然れども、思想上の迫害は却つて基督教思想の進歩を誘致し、二世紀の半ば頃、デアスチンの辨證論出で、基督教神學の先驅をなすに至れり。何が幸福を生むや、分らぬもの

なり。

有形無形の迫害中に在りて、基督者は年と共に其の數を増し、根を社會の各階級に下すに及び、眞個人類が衷心に渴仰せる救ひの道たること、事實に於て證明せられければ、第四世紀の初つ方、コンスタンチン大帝即位の後、勅令を發して日曜日休業を諭し、偶像の宮に入るを禁じ、自ら基督教の演説を宮中に於て試みるに至れり。さても變れば變るものかな。紀元三百二十五年に開かれたるニカヤ會議の光景は、能く此の間の消息を語るものなり。此の會議は信仰上の爭論を静めんが爲に、勅令を以て召集せられ、議員は宮中の賓客として待遇せられし程なるが、各國より參會せる監督三百十八名の中には、隻眼なるあり、跛者なるあり、甚だしきは生々しき傷痕を尙ほ繃帶せるもありきと傳へらる。曾ては國家の危険分子として虐遇せられ、今や宮中の賓客たり。是れ實に世態

の變遷の急速と基督教の勝利とを告ぐるものにあらずして何ぞや。

(四)中世紀の墮落と其の結果。 逆境の中に發展したる基督教は、事實に於て羅馬の宗教となりぬ。當時に於ける羅馬は、世界の中心たりしを以て、羅馬の宗教となりたる基督教は、亦世界の宗教となりたりしなり。政治は其の形式を變へ、國は分割せられ、或は統一せられ、治者は幾たび更まるとも、依然として基督教は世界の宗教たりき。是れ喜ぶべき現象なるが如しと雖も、實は然らざりき。爾等富める者は禍なる哉の語は、永久に亘りて眞理なるを證せられたり。基督教一たび羅馬の宗教となりてより、祭服を纏へる監督等が、縉紳に交はりて宮廷に翱翔する有様となりたるはよけれど、古來貧者の宗教たりし純朴なる基督教は、漸くにして世間的宗教と化し初めたり。以前の如き迫害なきのみならず、教會は日に領域を廣め、世界の表面に現はれたる國の中、殆ど總てが基督教

國となるに及び、世界に於ける中央教會の監督たる羅馬法王の權力は、各國々王を凌ぐに至り、人に使はれ多くの人に代りて生命を棄てん爲に來れる「人の子」の代表者は、却つて人の上に立ち、人を使ふ者となれり。初に當りては内外事情の必要もありたれど、兎に角基督教の生命は茲に消磨され、本領は失はれたりき。

生命なき宗教の維持法は唯是れなり。即ち祭壇を裝飾し、儀式を莊嚴にする事。華麗なる祭壇は、各戸に之を備ふべからず、莊嚴なる儀式は、各人之を執行すべからず。是に於てか生命なき宗教には僧侶なる宗教専門家を生ず。一般民衆は自ら宗教の事に與からず、擧げて僧侶任せとなる。僧俗の差別生せるは固より腐敗せる宗教の結果なりと雖も、之が爲に一層の墮落を來すは免れ難き所なり。基督教は斯くて十五世紀の初に至りて腐敗の頂點に達しぬ。

然れども、基督の生命は一見朽ちたりと思はれたる教會の中に潜在せり。世界最古の眞理は、腐朽せる種子を破り、最新生命として現はれたり。獨逸に於けるマルチン・ルウテルの運動は即ち是れ。ルウテルが主張とせし主張は、今日より見れば、敢て何等新奇卓抜なるに非ず。即ち彼は第一に、塵埃に埋没せる聖書を取り上げて之を読み、信仰の基礎を茲に置きたり。第二に、人は何等の條件なく、唯基督を信じて救はるゝと主張せり。第三に、人は總て神の前に平等なれば、勿論僧俗の分界あるべからず。故に各人各個直接神に交るを得、敢て法王監督の仲介を要せざるなり、といふにありき。是れ寧ろ尋常當然のこと、之を聖書に質すも、信仰的實驗に訴ふるも、當に斯くあるべかりし次第なれども、法王權、教會、及び儀式に不可抗的權威ありと認められ、贖罪券の如き不條理極まれるものゝ爲に、千金萬金を惜しまざりし時代に在りては、至當の道理をば却

つて危険思想と見做されたりき。假令遠からず、ポヘミヤのフッスは、正しき信仰のために火刑に處せられたりき。英のウイックリフは、死後墳墓を發かれたりき。而かも彼等が犠牲の血液の一滴も無益に流されざりき。彼等が涙と共に蒔きたる麥を、ルウテルは感謝を以て刈り取りたりしなり。

第十六世紀の改革運動に於ても、刃を出さん爲に我來れりとの耶蘇の語の眞理なるは證明せられたり。暗黒の世に光明現はれては、明暗二者の間に争闘なきを得ざるなり。ルウテルの信仰は、各國に争論の端を播き散らせり。而して遂に正義は勝てり。新生命の教會は、國から國へと傳はりぬ。獨逸を始め、佛英其の他激瀾たる新生命に觸れて若返りぬ。

(五)我國の基督教。ルウテルの改革運動に刺戟せられて、惰眠を貪りたりける天主教は、覺醒の端をゼスキット(耶蘇會社)の創立に開きたり。

一千五百四十九年(天文十七年)ゼスキットの宣教師フランシス・ザビエルが薩摩に着せるを首とし、天主教覺醒の餘波は我國にも及び、時の大小名を始め、數萬の武士が天主教を信奉するに至りしことは、能く人の知る所なり。爾後徳川氏の政策に由りて、甚だしき頓挫を來たし、絶滅するに至らざりしも、氣息奄々として今日に及べり。

基督新教が我國に傳へられたるは、第十八世紀の末頃以來、英米に勃興せる外國傳道の結果なり。聖書に示されたる耶蘇の教旨に基けば、外國傳道は寧ろ當然のこと、これ無きを以て却つて怪しとすべきなれど、昔時猶太的基督者が、自身及び其の同胞のみを神の子と信じたる如き傾向は、尙ほ今日に至りても、時に現はるゝものにて、動もすれば信者と未信者間又は同胞と外國人間に障壁を置き、現在に於て基督を知らざる國民は、本來呪はれたる者にてもあるかの様に考へられ易きものな

り。そは兎もあれ、外國傳道を等閑にせる時代の基督教の歴史は、實に恥辱のそれに外ならず、基督教の歴史は、信徒の怠慢と傲慢との爲に、痛ましくも此の恥辱を有す。吾等は英國の貧牧師ケリイ及び米國の大學生ミル等に向つて滿腔の謝意を表せざるべからず。外國傳道は、彼等の熱誠に由りて開始せられたればなり。其の結果として、ヘンリー・マルチン、ダッフ、ベエトン、リヴヰングストンの如き人傑出で、南洋の孤島にも、亞弗利加の蠻地にも、見るから美はしき救ひの花は咲き初めたりき。

此の波動は、東洋日の出の孤島をも逸せず、安政六年(一千八百五十九年)六人の宣教師(米國聖公會のウヰリヤムス、及びリギンス、同長老教會のヘボン、改革教會のブラウン、シモンズ及びフルベツキ諸氏)第一着に到來、麗々しき禁札の下に、苦心慘愴の勞苦空しからず、着後十三年、明治五年の春、數名の青年信徒を以て、日本に於ける最初の新教會は横濱

に建設せられぬ。夫より東京、神戸、其の他重要なる都市に諸種の教會は設立せられ、今日にては殆ど全國に涉りて餘す所なきに至れり。新教は天主教と異なり、法王或は教會の權威を重んぜざるを以て、創立以來頗る自治の精神を發揮せり。外人の援助を要せずして獨立自給せる教會、既に數百に上り、其の他の教會も皆之を目標として進むに至れり。

## 二 教會の使命

(一) 理想の教會。教會は團隊の一種なるが、相互の利益を目的とせる商事組合の如きに非ず。趣味嗜好を満足せしめんが爲に結合せる俱樂部の類にも非ず。寧ろ是は家庭に近しと謂ふべきか。團隊を二種に分ち上に在る者の下に在る者に向つて權を取らるものと、却つて下に在る者に使はるゝものとありとせば、家庭は後者に屬す。茲に「泣く子に地頭」といへるあり。地頭は強者なり、其の命令は理非に關せず、之に背くべから

ず。劣敗者の苦悶は、優勝者酒池肉林の歡樂となる。教會は此の如き團隊に非ず。「泣く子」は弱者なり、而かも一たび彼に泣かるれば、父親の鐵石心も其の爲に熔けざるを得ず。役所にては、机上の塵一本だにも給仕を呼びて取らしめざれば權威に關するかに思へる。横柄なる長官殿も、家庭に歸りては「泣く子」の爲に使はるゝなり。教會は實に之に類す。

多くの團隊に對する義務は、或は利益を目的とし、或は壓迫せられて之を守る。而かも家庭に在りては、何等外部よりの壓迫あるに非ず。利益を願ふにも非ず。唯内部に發せる愛心に餘儀なくせられ、進みて各自の義務を盡さんとするなり。教會は親子兄弟の如く、斷ち難き血肉關係に繋がるゝに非ずと雖も、愛に由りて結ばるゝ點に至りては則ち一なり。而して其の愛や、天地萬有の主宰者なる天父に發せるもの、されば教會は神に事ふる子供等の靈的家庭が、形體を爲して地上に現はれたるも

のと謂はるべし。此の世の家庭に近似せるも亦茲に基くか。何は兎もあれ、血肉の關係あるに非ず、法律の壓迫あるにも非ず、亦利益名譽を目的とするにも非ずして、自ら天父の愛に基ける束縛を感じ、進みて財を投じ、勇みて勞力に従へる人々に由りて成りたる教會が、此の世に存在し且つ發展しつゝあるてふ事實は、人意を強うするに足らずや、教會の會員として微力を盡しつゝある吾等は、別けて感謝に堪へざる心地するなり。

家庭に於て自他を害するの大なるは自己中心なり。最も貴きは犠牲なり。母親が其の子女を顧みることなく、一に自己の休安を計らば、如何にして子女心身の發達に良好なる結果を見むや。子女にして、若し自己の遊樂に専らにして、父母の心に従ふことなくば、争で父母を喜ばせんや。各人各個自己の利益榮達を計るに急ならば、家庭は有名無實なるを

免れざるなり。教會に在りても亦之に異ならず、それ教會は十字架上の基督に顯現せる神の犠牲的慈愛を基礎として成れるものなり。パウロは教會を以て基督の體に準らへたり、されば基督に倣へる犠牲なくして、一日も維持さるべからず。耶穌基督の犠牲的愛が各人に活躍し、全體に溢れたるもの、畧言すれば、最も鮮明に基督を現はせるもの、これを理想の教會なる。

(三)野戦隊。既に耶穌基督の心を以て心とする上は、個人としても、亦全體としても、利己的なる能はざるなり。自己の修養や安心立命の方便として教會に加入するは誤まれり。教會も亦自己の發達を以て念とするが如き、是れ基督の精神に非ず。自己の爲よりも他の爲に盡し、受くるよりは與ふるを以て幸福を感じる。基督の精神は正に是れなり。基督者の精神も亦斯くあらざるべからず。基督教會の目的も亦之を出づべか

らす。

基督を信じだにせば、教會に加入せずとも不可なきにあらずや、と曰ふ人あり。吾等も救の條件として、教會に加入するの必要を認めず。然れども神を愛する精神は、現はれて人を愛する行爲となる。同病相憐れむとさへいふものを、相似たる思想を有し、同一の基督に繋がる者が、親しく交はり、靈的事業を共にするに至るは、寧ろ人情の自然にあらずや。さらば信仰の中、既に教會の萌芽は孕まれたるなり。此の信仰は形體となり、數人集ひて團隊成る。而して將に大に爲さんとするに當りて、組織を整へ、訓練を密にするの要あり。斯くて教會は、形式上の發達をなす。是れ今日の教會なり。教會の存在は、第一に人生自然の情に基づき、第二に、大に救世の戰鬪を爲さん爲なり。南北兩朝に二分せられ、彼處此處に戰鬪は斷えず。此の時に當りて、我は南朝方なりと主張しながら、自ら一兵を

起さず、半金を投せずもあらば、天晴忠臣といはるべきか。

教會は罪惡征伐の爲に遣はされたる野戰隊なり。之に加入する必要ありや否など、氣概ある日本人は言はぬものなり。基督の愛を有する者は、爾しかく思ふまじきなり。救の條件としてに非ず、大に基督の心を爲さんために教會に加入せよ。教會なき地にある人は、同志を糾合して新設せよ。他人に缺點短所の厭はしきあらば、我にも我が知らざる缺點短所あるを想ひて忍耐せよ。徳川對豊臣の役に於て、太閤恩顧の大名等が、徳川方に興みせしは、家康の徳望に基づけりと見れば、首肯せらるると雖も、彼等が石田三成に快からざるを口實とせしは、誤まれり。我が主義方針だに一定せば、百の三成ありとも何かあらん。教會内、或は三成の如き人物なきを保し難し。而かも基督に救はれたる謙遜なる信者に取りては、悉く働きて益をなさぬは無きなり。彼は他を批評せんとするに當りて

必ず先づ自己を批評するが故なり。教會にして若し野戦隊たる本分を忘却し、通んで取らんとはせず、唯退嬰保守に汲々たるに至らば、既に基督の生命を喪失せるなり。後ろにあるものを忘れて、只管前方を望み、目標に向ひ進みて止まざるを、基督者の心事となす。失へる一匹の羊を搜索せん爲に、牢の中に安全なる十九匹を顧みるの進なきを、基督の精神となす。吾等は個人としても亦團隊としても、飽くまで他愛犠牲の精神を發揮せざるべからず。世には個人の利己、傲慢、また偏狹を卑みながら、團隊の同じま不徳を意とせざるもの多し。是れ甚だしき矛盾にあらずや。利己、傲慢、偏狹は、個人に取りても亦團隊に取りても不徳なり。故に闘えず活動しつゝある教會たりとも、其の精神にして唯自教會の繁榮を望むに止まらば、それは眞個基督の教會に非ず。基督の教會は、他愛犠牲の精神に驅られて、救世の軍に従

ひ、勇戦奮闘、進むを知らず退くを知らざる程のものたらざるべからず。

三 教會の行事

基督に由りて現はれたる神の慈愛に觸れて、從來の利己心を棄て、教會に加入せる以上は、飽くまで教會に對して忠實ならざるべからず。教會には毎週一定の集會あり、又臨時に諸種の會合あるべし。會員は自己の利益を目的となさず、教會の利益、又他の人の爲と思ひて、是等の集會に出席するを可とす。而して初心者の爲に聖書を開き與へなどして、基督の慈愛を行ひ、喜びて歸途に就くべし。三年五年の後、回顧して自己の精神に一大變化の來せるを發見すべきなり。

(二) 日曜日禮拜。諸種の集會中、特に重んずべきを日曜日禮拜となす。會員は自己の病氣か其の他公職の關係なき限り、必ず之に出席するては習慣を養ふを要す。日曜日禮拜に缺席するを以て大罪を犯せしかの



如く考ふるは熱心なる基督者の常なるが、茲に至りて恐るべき精神上の危機を通過し得べきなり。家人其他に對して面白からざる感情を有する折など、禮拜に出席するを厭はしく思ふことあれども、習慣性に驅られ、押して出席すれば、歸路には心すがくしく、全く別人になりたる心地するものなり。忠實に禮拜を守る者に向つては、懷疑の雲も其の行先をば妨げじ。

吾等は日曜日と稱へて之を重んず、而かも日曜日は、他の六日と別格なるに非ずして、眞先きの日なり。一週日中最初の日なり。吾等が此の日を貴ぶは、他の六日をも貴ぶものなり。此の日の聖き心もて、他の六日をば送らんとて、第一日を祝するなり。吾等は教會堂を聖所と稱へて之を敬ふ、而かも此處にのみ神在すとするに非ず、此處に準じて、他の場所―我等の家庭及び働き場、其他―をも貴ばんとして、先づ此の地

を祝するなり。教會堂に於ける禮拜の心を以て、殘る六日を一貫せんとするなり。

放縱不規則に慣れたる吾等に取りては、時間を違へずして出席するといふは、甚だ困難ならずとせじ。況んや從來の遊び仲間が、山へ河へと誘ふあるをや、されど、困難なるだけ勇氣を奮つて惰性と誘惑とに打勝たざるべからず。日曜日禮拜の内容は如何、之を初心者の方々に示さん、一概には言ひ難けれども、凡そ左の如きか。

イ、讚美歌。こは音樂なり。人生や自然界の美を歌へるにあらずして、神を稱へ、其の慈愛を讚め、又祈りの心を表はせるなれど、歌詞と曲譜とに由る所、正しく是れ音樂なり。歌詞も曲譜も、敬虔なる人々の手に成りたるもの、吾等は之を歌ふに當りて、善く曲譜を學び、歌詞の意義を思ひ、而して自ら歌中の人―即ち作歌者及び作曲者―と同化し、我が有とし

て歌ふべきなり。聲を以てせずして、心をもて歌ふべし。美ならんよりは、寧ろ熱心なるべし。

ロ、祈禱。祈禱は普通に司會者一人にてなすといへども、會衆一同を代表せるものなれば、各自祈禱者の精神に一致し、自ら祈禱する心構へになること肝要なり。最後に「アーメン」と和するは、其の心を表白するものなり。

ハ、聖書朗讀。基督者は、毎日聖書に親しみ居れば、敢て珍らしく感ずるにあらねど、禮拜席上の聖書は、周圍の空氣が靈氣に満ちたると、續いて爲さるゝ。牧師の説教と相待ちて、殊更に印象を深くするものなり。何の洞章と示さるゝ、儘に開き、隣りに初心者ありて指示されたる箇所を發見するに困り居るを見れば、無言のまゝに之を助け、司會者の朗讀に伴ひて注意熟讀するを要す。説教中に感ずる節あるば、聖書の空行に記入

し置くに、此を忘るべからず。何の洞章と指示されし時、自ら熟知せる箇所なりとも、聴き流しになすべからず。

ニ、説教。説教は禮拜の全部ならずと雖も、少くとも主要部を占む。基督教會に在りては、禮拜を以て無意義なる形式とせず、衷情より神徳を讚美し、深き恩寵を感謝するものとなす。故に、一層進みて宏大なる天父の慈愛を辨へ知らざるべからず。知らずして拜せば、無意義なる形式となり果てぬ。説教の重んずべきは之を以ても知らるべきか。説教此の如く重要なれば、説教者としては十分之が爲に力を盡すべきは勿論なるが、聴衆は其の心掛け一ツにて、砂利の如き説教の中に、金塊を發見すべし。善き心掛けの第一は、自己を直接の地位に置きて聽くことなり。此の説教は他人の爲に非ず、我が爲なり。我に拘つて話さるゝなりと謙遜なる覺悟なかるべからず。自ら聴衆の外に居り、或は説教者の土に立つ

が如き冷淡傲慢なる態度に出づる人は、何事爲す所あるべからざるなり。善き心掛けの第二は、必ず實行するてふ考をもて聽くことなり。人動もすれば深遠なる思想、巧妙なる辯説を説教者に求めんとす。而して彼等は唯聽くのみにて、實行は依然として舊の儘なり。傳説に曰ふ、往昔使徒ヨハネ、老いて自ら歩して教會堂に行き能はざるに當り、弟子等彼を肩にして會堂の中央なる高壇に坐せしむれば、彼先づ手を動かして曰く、「子供等よ、ア、此の一語、是れ聽衆が熱望せるもの、彼等の心如何に躍りしぞや。次に語り出して曰く、爾等互に愛せよ」と。之を繰返すこと數回にして、會衆歡喜の中に、老ヨハネは弟子の肩に乗せられて歸りぬと。

實行を意とせざる聽衆に取りては、ヨハネの説教は、平凡聽くに堪へざるものなりき。而かも實行家に取りては、千古の金言なりき。

ホ、聖禮典。一般に聖禮典と認められたるは洗禮と晚餐式となり。

洗禮は、一生涯に一度、教會に加入せんとする時施さるゝ所の儀式なり。洗禮の必要如何は教會に加入する必要如何といふに歸すべし。吾等は基督に信頼する外に、救ひの爲に條件なきを信するもの、故に救ひの條件として洗禮を受くる能はざるなり。吾等が信する所に由れば、現時の洗禮は、既に基督を信仰せる人が、大に基督の爲に爲す所あらんとて、基督の野戦隊なる教會に加入する時の入會式に外ならず。されば、他の形式に従ひて誓約するとも敢て不可ならざるなり。然れども、二千年來此の式を受けたる未だ受けざるを以て、信者と未信者とを分ち來れる此の宣誓式に、何の儀式を以て代ふべきか。表白し難き歴史的印象、神々しき苦など、新築の建物には容易に生えぬものなり。内に潜める信仰を、外部に發展する形式として、之に勝るものあるべからず。洗禮を愚にもつかぬと嘲る人は、未だ其の心の碎かれざるを表明せるなり。

晩餐式は既に洗禮を受けたる基督者の與かる儀式にて、教會に由りて毎週、毎月、或は年に數回、行はるゝあり。我が爲に肉を裂き血を流せる基督を記念感謝しながら、麵包を受け、葡萄酒を飲むべし。言語文章を以て表白し難き基督教の意義を、自ら會得するに至るべきなり。

へ、獻金。 毎月額を定めて教會員、其の他關係者は、獻金をなすの常なるが、其の上教會には、禮拜席上に於て獻金籠を廻して、募金する慣例あり。こは教會員が信任せる役員の手に渡り、教會の維持及び外部に向つて發展の爲に使用せらるゝなり。吾等は神國擴張の爲に軍資を獻納する思ひにて、自ら節約して多く出すことを學ばざるべからず。吾等が教會に出せる額、生涯積りて三千圓と思ふに無益なる煙草を廢して、其の額を教會に獻納せば、これ丈の金額を出すは、貧者にも能くすべきか。止りたゆませば、吾等は善良に使用せむと誓じて、此の金の爲に

喜び感謝するを得むか。金は人を益し又害ふ。之を信仰の爲に使用するに及びて、我が靈は金の爲に益を受けたるなり。

と、祝禱。最後の讚美歌を歌ひ、起立の儘にて、父子、聖靈の三重神に由れる祝禱を受け、靜肅に退散すべし。高聲に雜談し、折角高潮せる精神を、着宅に先ちて失ふ勿れ。

(二)日曜學校。 日曜學校といへど、別に普通の學校あるにあらず。いは小兒教會とも呼ばるべき程のものなり。今何れの教會にても之なきはあらず。御伽話や音楽を主として授け、無邪氣なる小兒を無邪氣なる儘に、信仰心を養ひ、家庭に在りても、學校に在りても、力めて善良なる小兒たらしめんことを期するなり。誰に取りても、不信仰は禍なり。懷疑は苦痛なり。出来るものならば、單純なる信仰を受け、平和なる幸福を味ひ

たきものと望まぬ人として無かるべし、而かも信じ能はざる所以のものは、其の性質に基けるに、あらで、寧ろ境遇に關係せるなり。小兒時代より信仰的空氣を呼吸して成長せる者は幸ならずや。小兒の幸福を望まる父母よ、日曜學校に送ることを忘るゝ勿れ。

或は教育家の中に、休日たるべき日曜日に物を數ふるは、腦力過勞の虞ありとて、日曜學校を好まざる人あるやに聞く。一應尤ものことなり。然れども、日曜日の一時間は、生徒に取りて苦しき時にあらで、非常に樂しき時間なり。彼等が大好物なる御伽話―著者の家にては毎晩就寢時に御伽話を聽かしむるの例なるが、子供等が過失の懲罰として、時々休むことあり。先づ重き罰として彼等に應ふ―は、此處に聽かせられ、其の好むこと御伽話に勝りたる唱歌を此處に學ぶなれば、彼等は喜び樂しみて集ひ來るなり。夢にも腦力過勞の害はあらじ。

或は無邪氣なる小兒に宗教を強ゆるの不可なる點より、日曜學校に反對するあり。然れども、教會にては宗教を強ゆるが如きこと萬々これなし。彼等の理性發達して、一人前の判斷力を有すと認むるに至らざれば、**縦し**本人の希望なりとも、教會員に加ふるが如きことあらざるなり。

(三)祈禱會。何れの教會にても、概ね毎週一回、一定の時、豫定の場所に祈禱會を開くが常なり。裏に信仰の生氣満ちてあらば、祈禱會ほど樂しき經驗は無かるべきが、單なる形式に流れなば、これほど窮屈なる集會は復たとあるべからず。樂しきか、窮屈なるかは、各自の心情一ツにて定まるなり。會員は勇みて此の集會に出で、或は信仰上經驗せし所を語り、或は祈禱し感謝すべきなり。祈禱會に於て注意すべき點は、

第一、着席するに當りて互に接近すべきことなり。居は心に移すものにて、後方に孤立し、衆と離れ居らば、精神も亦離るゝの恐あり。人と離

れ、人と和せずしては、甚だしく祈禱心を養はるゝものなり。  
 第三、間斷なからしむることなり。祈禱心奮はず先後を遠慮して控へ目勝ちなる時、間斷は生ずるなり。折角熱したる空氣も、一分時の間斷にて冷却するもの、故に重複するありとも、間斷おらしむる勿れ。

第三、高聲簡單なるべし。祈禱會に於ける祈禱は我一人なせるにあらず、我が祈禱に同情同和せる多くの人あり、彼等は「ア、メン」と稱へて其の意を表はず、されば我が聲は彼等に聴こゆる程のものならざるべからず、代表者としての祈禱なるが故に、多數者の辨へざる巨細の點に涉らざる方、可なり、故に極めて簡明なるべし。

第四、全體の歩調に合すべし。特に感話に於て然りとす、會衆凡て或一事に熱中し、祈禱し、感話せる最中に、其の事に全く無關係なる話をなし、歩調を破るが如きは不可なり、何れの場合に在りても、有聲なるは

冷静に議論することなり、特に反信仰的議論を紹介することなりとす。

(四)傳道說教會。毎週日曜日の夜間、或は臨時に傳道說教會を開かざる教會はなし、此の集會は、都會にては教會員に重んぜられざる傾向なしとせず、基督教會は、基督の野戦隊なりとせば、傳道集會は、教會の主要部を占む、基督の心を有する會員は、今一層此の集會の爲に苦心する所無かるべからず、禮拜の集會が教會現在の勢力を示すとせば、傳道說教會は、將來の發展を語るものなり、禮拜集會を家の主人なりとせば、傳道集會は相續者なり、油斷せずして各自の使命を果さるべからず。

會員は傳道說教會に自ら出席するに止まらず、親しき人を之に誘ひ、會堂内にては其の人の爲に萬端の世話をなし、歸路說教中、特に重要な點を繰返し、難解の意義を説明し聽かすべし、多くの場合に在りては、後の説明は前の說教に勝りて効果あるものなり。

(五) クリスマス。基督降誕祭は、新たに日本祝日の一となりたる觀あり。信者は固より、未信者までも、此の日を祝して、贈物、賀状を授受するもの愈多からんとする有様なり。十二月廿五日は、耶蘇が實際誕生せる日にあらずとするも、確實に定め難き限りは、從來(第四世紀以來)の慣例に従ひて、此の日を祝日とするも敢て不可ならず。

此の日は、神が獨生兒を世に賜はりたる記念日なり。耶蘇の誕生日に於て、吾等各自靈性の誕生日なり。別けて小兒の楽しむ日なるが、大人も亦子供心となりて、嬉戯して可なり。特に此の日は、世界最大の贈物を神より受けたる記念日なれば、御互に受くるよりは寧ろ與ふるを樂しむべし。教會に於ける無名の贈物、家庭に於けるサンクスの贈物など最も妙なり。子供等及び召使ひ等へは、日頃より斯かる時の爲に小遣ひ錢を與へ置くが、然らずば別格に少額の小遣ひ錢を授けて、思ひに贈

物を整へしめ、與ふる者の幸福を實驗せしむべきなり。吾等も子供等同様、先づ與へられ、次に他へ與ふるなれば、與ふるを唯喜ぶべし。之が爲に誇る筋とはあらざるなり。

(六) イースター。復活祭は、誕生祭の如く不確實ならず、されど各國曆法の一定せざるより、區々に別れたりしが、第四世紀の前半、ニカヤ會議の決議に基き、春期満月後、第一日曜日をも以て其の日と定め、爾來各國共に此の計算に従ひたり。我が曆法に従へば、或は三月のことあり、或は四月のこともあり、て不定なれども、各國同一日に基督の復活を祝するは力強からずや。

基督教は元來復活の宗教なり。迫害され、殺されても亡びざるものなり。一見生命なきが如かりし野山は、新芽を發じ、満目一新、天地茲に復活せる頃ほひ、基督の復活を祝するは樂しからずとせんや。復活を信じて

之を祝する吾等は、復活の人たる覺悟肝要なり。復活の人は、永久世界の住者なり。貧老病死の四苦といへども、永久世界に其の手を伸ばし能はず。イ、ス、タ、ス、は、吾等をして如何なる境遇にあるとも、希望の人たらしむるなり。

まはれ儀式は宗教の衣裳に過ぎず。中に生命なくば、如何に莊嚴なりとも、畢竟衣紋竿の晴衣のみ。遂に群雀の侮る所とならん。最も熱心に祈り且つ實驗すべきは、現に生ける基督の愛なり。我が裏に活躍せる彼の生命なり。

### 結論

吾等は甚だ不十分ながらも、基督教の概略に關して觀るがまゝを述

べたり。而して益、基督教の中心が耶蘇と呼ばれたる一人格なるを知れり。否、彼は基督教の中心たりしのみならず、寧ろ全體なり。基督教は彼に初まり、彼に中ち、而して彼を目標となす。若し基督教の教理の上より言はず、各宗教を比較研究し、取長補短、新たに一宗教を作らば、今日の時勢より見て、基督教に優るもの成立するやも計られざるなり。然れども是れ唯教理のみ、其の裏に人を支配する力は發見せられざるなり。甲の鼻乙の眼、丙の口元を取り合せて、絶世の美人を作りたりとも、既に生命を失へる者ならば、何の役に立つべき。夫れ宗教の成人に厭はるゝは、生命なき形骸より發する臭氣の爲ならずむば、難解なる小理窟の爲なり。信念厚く愛情豊かなる生ける人格者を、それと知りて厭ひ避くるものあらんや。基督教は、儀式にあらず、また教理にも非ず、永久に生ける人格者耶蘇基督彼自身なり。



耶穌曰「我は途なり真理なり生命なり」(約翰傳第十四の六)

吾等は「人觀」に於て、人に関し聊か學ぶ所ありき。而して得し所は極めて不完全なる抽象的議論に止まりき。夫れ「人」の解釋は、即ち「我」の解釋なり。我の本質、我の生命、及び我の死後に關する問題の説明なり。我は自ら主觀し反省したるのみにては、茫漠として雲を捕ふる如く、何等得る所なきが故に、「人」を鏡面に映して客觀せしなれど、鏡面の粗末なりし爲に、僅は不完全なる我を斷片的に發見したるに過ぎざりき。然るに、吾等は耶穌基督に於て、完全なる人、即ち眞我を映すべき鏡面を見出せり。古來賢人、學者、英雄、豪傑の士は少からず、義人、烈婦、若しくは美術工藝上の天才也、亦乏しとせず。されど多くは一面に秀でたるのみにて、「人」にして安全なる心には非ず。吾等は斷片的に智識を甲學者に、勇

氣を乙英雄に、忠孝を丙義人に見出す。夫れ「人」を誰人に求むべきや。古往今來、眞個の「人」は基督のみ。唯夫れ「人」たり。是を以て學者、官吏、實業家、また老幼男女の區別なく、彼を師とし、その中に眞個の我を映すべし。貧者は彼に學びて貧に喜ぶの道を知り、富者は彼に學びて富を樂しむの法を覺る。生死は吾等が知らんと欲する所、而かも學者の死生觀を聽くも、印度人が綿を以て雪の説明を聽きたらん如くにて、會得せる所甚だ深からず。生死を具體的に示せるを基督となす。萬人總て吾等の爲に生命を示す。而かも其の生や甚だ不完全にして、信愛望の生氣乏しく、從つて靈性の發揮せること極めて淺きを如何にせんや。基督に於て吾等は靈性の最高潮を見出し、神の子たる自覺を學べり。萬人は吾等の爲に死を示す。而かも其の死や唯人生の果敢なきを語るのみにて、吾等をして絶望の淵に沈ましむるを如何にせんや。基督に於て吾等は死後の希望を

見出せり、眞個の「人」の永世不死を信すべき鍵を吾等は初めて基督に發見せり。

吾等は曾て耶蘇の道德に關して批評を加へざりき。不可能事と信じられたるなり。吾等若し虚心平氣に我が國現代道德の理想とし標準とする所と、徳川以前のそれとを比較せば、其の變化の甚だしきに驚かむ。昔時に在りては、婦人に對する男子の德義、子に對する親の德義、及び臣に對する主君の德義、之を略言すれば、弱者に對する強者の德義はあらざりき。皆無ならずとも甚だ薄弱なりき。而して今や然らず。昔時に在りては、男子家を出づれば七人の敵ありの俚言に現はれたる如く、人に接するや敵に對する如くなりき。日本國外を敵とするは勿論、國內にても、他藩他郷の人を敵として遇し、討伐殺戮を事とし、寧ろ之を名譽とせり。而して今や則ち然らず。是等の變化は、世界の趨勢に伴へるものといはば、

いはるべし。而かも直接或は間接に、基督教の感化を蒙りたるものならずむばあらず。少くとも現代道德の理想を示せる羅針盤は、其の針端基督に向へり。此の如き有機なれば、吾等は何の標準を以て耶蘇の道德を批判すべきぞ。彼は無罪なり、品性に一點の曇りなしといふとも、唯名稱を附したるに過ぎじ。

吾等は曾て第三章第一節に於て受肉降世を説き、基督を以て神が人生に顯現せるものと信する旨を述べたり。彼若し神の顯現なりしならば、半神半人にはあらずやとも疑はる。故に彼を以て神性と人性とを兼有するものと信じ、一人格二性質の超人となせることも久しかりき。此の中確かに眞理の一面を語るものあり。然れども基督は眞個「人」なり。神が人生に現はれて人となりしならば、之に勝る眞人あるべきや。既に彼を受けたる世界の人類よ、「人」に關する議論を中止して、此の眞人を仰ぎ

見よ、人の本性は彼に發揮し、神の子の姿甚だ鮮明なり。其の眞人を敬ぶるは、眞神なり。吾等は偶像教の世に害ありて益なきを知る。其の益なきは人が自ら作りたるもの故、人を保護し、支配し能はざればなり。其の害あるは、愚者を瞞着する爲に使用せらるればなり。然れども吾等が信する天地萬有の主宰者にして、人類の父なる神も、若し之を信するに吾等の智識を根據とせば、そは我が智識を材料として製作せる偶像に外ならず。某哲學者が説きたる有神論を基礎とせば、そは其の哲學者が製作せる偶像ならんのみ。形體こそ無けれ、人が製作せるものなれば、畢竟其の性質は偶像は異ならざるなり。此の如き神は、人を保護し又支配する力を有せず。僞善者利用の手段となりて、世に害毒を流すに至らずむば幸なれ。其の偶像ならざる眞神を信するの途唯一あり、神自ら我等に顯現し、具

體的に自己を示し、吾等をして服従信頼せしむるは、是れのみ。而して吾等は之を耶蘇基督に見出したり。何より先づ彼の意識に問はん、*ド*ッボ彼に曰ひけるは、主よ、吾等に父を現はし給へ、さらば足れり。耶蘇彼に曰ひけるは、*ド*ッボ、我れ斯く久しく爾等と偕に居りしに、未だ我を知らざるか、我を見し者は父を見しなり。何ぞ父を我等に現はせといふや、我れ父に居り、父の我に居ることを信せざるか、我が爾等に語りしことは、自ら語りしに非ず、我に居る父其業を爲せるなり。(約翰傳十四の八)即ち彼の意識に従へば、彼は完全なる天父の顯現——其の性格、行爲、言語など、總ての方面に於て非ざるなり。其の業を爲せるは、*ド*ッボ、吾等は基督を眞神と信す、斯くて吾等は偶像教の方便主義を免るゝなり。或は曰はん、曩には彼を眞人と呼びながら、今茲に眞神といふは矛盾の甚だ地さるものならずやと。一應免もの質疑なり。然れども再考せよ、

本來人は神に似せて造られたるもの——是れ吾等の信仰なり——故に神の心は人の標準、神は人の模範たり。されば耶穌が真人たるは、即ち眞神たる所以にして、其の裏に二性あるにあらず。神受肉降世して真人茲に現はれぬ、而して彼や尙ほ神たるを失はず、永久に人生に顯現せる眞神なり。受肉降世せずとも、眞神は永久に存在せり、而かも人生に現はれたるは、基督に始まる。彼に因りて人類は無限無量なる天父の慈愛に接したり。

貧窮に悩み、病苦に嘆く者、さては悪人罪人として世に嫌惡されたる人々に至るまで、一たび耶穌に見出されては、別人の如く變りぬ。盲者は視、跛者は歩み、癩病人は潔まり、聾者は聽き、死にたる者は甦され、貧しき者は福音を聞かせらる。馬太十一の五の語は、善く這般の消息を漏らし、背き侍れる者は、救はんとて涙りし液を誤りて、爾我を亡ぼるべしとて

來れるか」と口實を設けて逃れんとせしも、彼は之を救ひたり。世界最大の贈物として神自ら人生に宿り、其の結果、吾等の中に現はれたる彼れ基督は、其の生命を吾等に與へ、吾等をして彼に由りて生くる者たらしめたり。天父が人類に對する犠牲の果たる基督の生涯と其の死とは、完全なる犠牲の表現なりき。子等に對する父の愛を示すに於て、基督に不足を感ずる者ありや。

人生に顯現せる眞神として吾等に臨みて、基督の曰く「我に従へ」基督者は彼に従ひたる者なり。彼をして我に従はしめんとするに非ず。彼に従へる基督者は、彼を仰ぎて、誠に父の生み給へる獨生子の榮光にして、恩寵と眞理にて滿てる。〔約翰傳一の十四〕を見る。學者は思想の斷片を示すに過ぎず。生ける神は彼れ自身の顯現に由りてのみ知らる。吾等は古來の學者に由り、神に就いて學びたりしが、基督に接し初めて生ける神

を有りの儘に見たり。

### 三、基督は神人關係の體現なり

正當なる神人關係を吾等は宗教と名く、宗教的信念を以て神と共に世を渡るを信仰生活と呼ぶ。古來聖き信仰生活を送り、吾等をして欽慕の念に堪へざらしむるもの、少しとせじ。聖アウガスチン然り、聖フランシス亦然り。若し夫れ進みて使徒パウロを見んか、彼初めは基督に背ける者なりしが、一たび愛の手に捕へられてよりは、彼の生命は彼の所有にあらざりき。我が生けるは基督の爲め、また死ぬるも我が益なり……我が願ひは世を逝りて基督と共に居らんことなり。是れ最も善き事なり。されど我が肉體に留まるは爾等の爲め更に必要なり。腓立比一の二十一―此の如き篤信なるパウロは、頑迷なる保守的基督者の反抗を受けながらも、基督の救ひを説きて已まざりき。彼の生活が如何に犠牲を

示せしか、請ふ彼をして語らしめよ。曰く……又我は五度猶太人に四十に一を減じたる鞭を受け、三度杖にて撲たれ、一度石にて撃たれ、三たび破船に遭ひ、一晝夜海にあり、又屢、旅路を經、且つ河の難、盜賊の難、同族の難、異邦人の難、街の中の難、野の中の難、海中の難、偽りの兄弟の中の難に遭へり……此に言はざる、外の事ありて日々我に迫る、即ち總ての教會の憂慮なり。誰か弱りて我が心弱らざらんや、誰か躓きて我が心熱せざらんや。哥林多後書十一の廿四―と傳説に由れば、後年羅馬に於て十字架上の慘死を遂げたりと。而かも彼の犠牲的生活は、全世界に新生命を與ふるの因たりしに由りて空しからざりき。彼や實に世界に於ける巨人の一なり。

然れどもパウロの偉大を想ふ時、吾等は其の背景に耶穌基督あるを忘るべからず。彼の生命基督に同化されしに由ることを思はざるべか

を信仰生活の理想は唯耶蘇基督に表現されたるなり。眞神として父の愛は彼に現はれ、眞人として子の柔順、信賴亦彼に示され、而して二者の關係なる信仰生活は、鮮かに彼に體現せり。人或は曰ふ、宗教は惡人の爲にあるものなるが故に、吾等如き善人に取りては必要ならじと。豈夫れ然らんや。基督に於て體現されたる信仰生活は、父子の和親なり、抱合なり、罪惡潔められて益、此の生活は發展せんのみ。人に缺點なくば、宗教の要なしといふべけんや。

父子の交情は、基督に體現せられて有の儘我等に示されたり。新たに信仰に入らんとする者は、彼の生活中心を基督のそれと一致せしめ、我てふ小圓が基督てふ大圓の中に包まれて、二圓の中心が一點に歸するを期せよ。斯くて基督の信仰を受けて我が有となし、基督の生命に生くる時、バツロと共に「基督我に在りて生く」と叫ぶを得ん。更心の途は唯是

れのみ。

## 基督教の研究終

明治四十四年九月二十一日印刷  
明治四十四年九月廿五日發行

基督教の研究

定價金五拾錢

著者 井口彌壽男

發行者 山縣操

東京府下北豐島郡巢鴨町大字上駒込十九番地

印刷者 荻原勝次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地



不許  
複製

發行所

東京北豐島郡巢鴨町上駒込二十番地  
電話 下谷 四百三十八番

内外出版協會

(振替口座東京三百五十五番)

井口彌壽男著

# 演說講演說教法

定價金貳拾錢  
郵稅貳錢

## 第一章 概説

第一 演説の必要  
第二 雄辯とは何ぞ  
第三 練習の必要

## 第二章 準備

第一 間接準備  
第二 直接準備

(一)趣旨と演題 (二)材料の蒐集  
(三)演説の組織

(イ)緒論 (ロ)本論 (ハ)結論

## 第三章 登壇

第一 草稿携帶の可否  
第二 姿勢  
第三 心構へ  
第四 言語  
第五 音聲

演説は往年政黨勃興時代に最も盛んであつたのが、中頃一たび衰へて、近時及び又漸く盛ならんとして居る。講演は年と共に之を必要とする範圍が廣まり、之を必要とする場合が多くなつて、今や都にも鄙にも頻りに其の會が開催される有様である。説教は昔から相變らず行はれて居る。要するに演説も講演も又説教も世が文明に進むと共にますます行はれて來るのは必然の理である。本書は著者が第一自己の経験に基き、其の上内外大家の説をも參照して記述した新著であつて、一言一句の時勢の要求する書とは、實に本書の如きものを謂ふのであらう。

# 書著大五スルイマス

▲本讀好の養涵性徳▲訓教大の實着健穩▲  
▲力動原の化感士名▲範模活の營自立獨▲

職分論

金壹圓五拾錢  
小包郵稅拾貳錢

品性論

金壹圓五拾錢  
小包郵稅拾貳錢

勤儉論

金壹圓貳拾錢  
小包郵稅拾貳錢

自助論

金壹圓五拾錢  
小包郵稅拾貳錢

勞働論

金壹圓五拾錢  
小包郵稅拾貳錢

元版 會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 (番五五三京東座口金貯替振)

元版 會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 (番五五三京東座口金貯替振)



IMITATION OF CHRIST

章四十百一卷四全

日高  
善述

# 基督の模倣

四卷全一冊  
定價金七拾錢  
郵稅六錢

福音新報の批評

トマス・ア・ケムピスの『基督の模倣』は、聖書

に次ぎて今日も世界の基督教徒に愛讀せられて居る書なり。日本にもこれまで同書の翻譯せられしもの二つありき。而して松田承久氏の『世範』と名付けられたるもの廣く行はれたり。此度また日高氏の譯本新に世に出たり。之を見るに『世範』よりは種々の點に於て進歩せりと言ふを躊躇せず。譯者が此の勞多き事業を斯の如く成功されたるを多とせざるを得ず。日本の基督教徒は、信仰を養ひ徳を立つるの好伴侶を與へられたりと謂ふべし。

新本の批評

トマス・ア・ケムピスの此書が、あれ程有名な

書でありながら、今まで其の譯書が出なかつたのは寧ろ不思議である。それを今度日高氏が英譯書より重譯して公にされた事は、我々の感謝する所である。文章は雄健莊重な原文の面影を遺憾なく傳へて居る。邦語譯の世界的宗教書を得たことを我々は喜ぶ。

東京 東口 芝 上野 駒込 二丁目 十二番 地番五十五 内出版外協會 元版出

松本 越  
編著

# 基督

再版  
定價金壹圓貳拾錢  
郵稅十二錢

「護教批評」  
世界三聖傳の一として『基督』出でぬ。著者は誰ぞ。誠にシモン・キリヤンが「何處に往く」を譯し文名を知られたる松本氏なり。松本氏は弱冠にして信仰の門に入り、諸先輩に私淑して心盡上修むる所淺からず、ますます基督教の堂奥に達せんと欲して、潜心基督の生涯を研究し、其の結果を發表せるもの本書即ち是れなり。著者の如きは洵に基督を傳ふるに適せりと謂ふべし。著者は重にも材料をテイ・イン・フアラアの『基督傳』及びビッド・スミスの『基督在世の時』に採り、簡潔なる筆を以て趣味深く記述せり。我が邦未だ完全の基督傳あらず、竹越氏の『基督の傳記』海老名氏の『基督傳』ストーカー、ニコル、プロード、ルナン等の譯書等稍々見るに足るものありと雖も、案簡宜しきを以て中正不偏なるもの少きを憚みとす。此の時に當り本書の出版ありしは、基督教文學の爲めに慶賀せざるを得ず。惟ふに基督傳の研究は、直ちに基督教の中心に接觸し、堅實なる信仰を樹立するの基たるべし。吾人は此の良書を世に推薦するに躊躇せざるなり。……

西脇玉峯編著

# 孔子

（再）  
定價金壹圓  
郵稅十二錢  
（再）  
定價金壹圓貳拾錢  
郵稅十二錢

大屋徳城編著

東京 東口 芝 上野 駒込 二丁目 十二番 地番五十五 内出版外協會 元版

The Three Homes

# 庭家三小説

本美綴スロク \* 版再評好  
錢貳拾稅郵 \* 圓壹金價定

純良なる品性を養成し高潔なる情操を鼓吹する本  
書の如きは誠にか家庭小説の上乗なるものと謂ふ  
可し。予は原書が英米の多くの家庭に珍重せられ  
ことが如く、此譯書が我多数の家庭に歓迎せられん  
ことを切望して已まざる者なり。

## ▲原田同志社長序文の一節

同志海老澤氏、有名なる英書『三家庭』の翻譯を公  
にせらる、行文流暢にして章句簡淨、よく原文の  
妙趣を傳へて、而も邦人の理解に易からしめたる叙  
述の巧なる、眞に一讀卷を捨つるに忍びざらしむ  
實に是れ我國現時の家庭に推奨する能はざる好  
文なり。余は日本教育の爲に此書の廣く日本家  
庭の間に行はれんことを切に祈る。

## ▲新渡戸博士序文の一節

博士 海老澤亮一 原著  
法學博士 農學博士 新渡戸稻造 序文  
同志社々長 原田 助 序文  
神學博士 ギュリック 序文

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元 版  
番五十五百三京中金貯替振

著原ントスーサ  
譯雨紅川碧

# 正僧年少小説

錢八稅郵 圓壹金價定 本美綴スロク

## 「報知新聞」曰く

トードと云ふ不良少年が  
慈愛に富めるブルックヌ  
僧正より温かき一言を與へられたるが動機となりて  
從來の素行を悔改して新生涯に入り、漸次其の身を  
勞役して弱者を救ひ憐れみ、殊にトードの犯罪の爲  
め行衛不明となり遂に墮落の淵に陥れる少年を救ひ  
出し、共に益々光輝ある愛の生涯を送るといふ感化  
小説なるが、此間に配するに可憐にして敬虔の念  
深き少女、愛子の墮落を嘆く母、人の愛を嫉む書記、  
慈愛に富む貴夫人、小學校教師等を以てしたる外、電  
車の運轉手車掌の同盟罷業の活劇などありて結構  
非常に面白きが上に譯文亦流麗にして  
此種の物に免れ難き晦澁にしてバタ臭き所なければ  
何等の苦痛なく愉快に讀ましむ。吾人の如きは  
一讀卷を閉づるに忍びず、三讀を重ね、  
多大の教訓を受け、第二の「噫無情」を讀  
むの感を起さしめたり。實に近來になき  
良書といふべく、譯者の勞を謝すると共に汎く江  
湖に推奨するものなり。

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元 版  
番五十五百三京中金貯替振

原正男

# 日曜學校御伽草紙

定價金廿五錢  
郵稅四錢

日曜學校及び基督教を奉ずる男女學校に附屬する各種初等學校に於て、修身訓話を授くる際、の用書として、又生徒に與ふる賞品として、最も恰適なる書が出来ました。趣味あり教訓あるお伽話二十五篇、何れも材を事實に取りて基督の訓言に副ふ所あり、而も少年少女に十分なる感興を起さしむるに足るのであります。故にまた之を一般家庭に備へてお子供衆の讀み物として宜しいこれを讀む少年少女諸君の内から、三人でも五人でも、善良な人となつて眞面目に正しく世渡りしやうと志す人が出来れば我が願足る、とは譯者の言であります。

## 目次

- ▲日光の囀話
- ▲鷓鴣の囀話
- ▲知更鳥の囀話
- ▲感心な少女
- ▲捕鯊の小猫
- ▲食食の蛇
- ▲やどかり蟹
- ▲煙突の上の人
- ▲離船と犬
- ▲奇妙な家
- ▲復活の話
- ▲馬喰の話
- ▲音楽と小動物
- ▲細乳石洞に於ける
- ▲眞珠探り
- ▲船長の話
- ▲馬と犬との教訓
- ▲勤勉なる青年
- ▲習慣の力
- ▲卵を賣る少女
- ▲雨乞
- ▲小さな燈籠守
- ▲迷へる羊
- ▲クリスマスの話
- ▲他人の危き時

元版 東管貯金 町三京 上東 駒三 込百 十二番 五番 内外出版協會

## 日曜文庫 第一編

# 母のゆくへ

百島 操譯

定價金拾錢 郵稅四錢

日本の少年石童丸が、父を尋ねて高野山へ登つたのは昔の話、この少年は行くへの知れぬ母を尋ねて、遙々外國へ渡つたのである。

『母のゆくへ』は伊太利の文豪アマチスの作であつて、有名な Core 中の最傑作最長篇である。伊太利の田舎に育つた十三歳の少年が、南亞米利加へ出稼ぎに往つて音信の絶えた母を慕ひ、雲や霧、路遙かなる外國へ行方索めて往く話。長い船旅の後、目的地へ着いて見れば母は在らず、それからそれへと尋ねて往けど、いつも母は遠方へ移住したあとで、其のうちに旅費は無くなる、いろ／＼の難儀に出逢ふ、その憐れさ、その艱苦、讀んで思はず泣かされる。丁度活動寫眞でも見て居るやうで、後はどうなるか／＼と讀者に案じさせる。然し神は孝心篤き少年に恵を垂れて、終に臨終の間際と見えた母に會はせる、其の歡喜で母は生きかへるといふ大團圓。

尙ほ附録の短篇數種、「勇ましき少年」、「親の病氣」、「難破船」、「子供心」等で何れも面白からぬは無い。

元版出 東管貯金 町三京 上東 駒三 込百 十二番 五番 内外出版協會

述譯郎次増田本<sup>ルトクド</sup> 著原ルエウス

# 小説 黒馬物語

錢六稅郵 錢拾五金價定 版三第

評批の誌雜會育教人婦本日大

米國人道教育會にては、此原著を頒布せると既に三百萬部に及べりと云ふ

『黒馬物語』は『アラック、ビニーチー』の翻譯でありまして譯者は本田増次郎氏でございます。文章は快活に流暢にまた至極平易であつて、大人にも勿論面白く小供にも分ります。物語の成立は『アラック、ビニーチー』といふ美しい黒馬の自叙傳で、農夫グレンの牧場に生れ、種々の運命に遭遇して流轉の間に或時はゴルドンといふ情け深い郷士の家に、或時は虚榮心に富んで居る伯爵夫人に、また或時は辻馬車屋に、紳士に夫人に、種々なる主人を持つて様々の勞役に従ひ、嬉しいことつらいこと種々の経験を物語るのでありますが、趣味の間に教訓を散し教訓の間に趣味を交へて、四百頁に近い冊子がいつの間にか読み終られるのでございませぬ。そしてこれまで動物についてさほどの興味を持ちませんでした私共でも、動物の境遇はこのやうなものかと切に同情の念を増し、一方には辻馬車屋シエター、馬丁のシモン、郷士ゴルドンなどの主張や人格によつて、英國紳士の面影が充分に知られますゆゑ、少年少女には是非讀ませたい書物であると思ひます。

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢東 元版

編譯泉冷島百

(編十第)

# 小公子

上中流社會の家庭に廣く讀まれ、少年少女諸子の世界に善良なる感化を與へつゝある本叢書に、此の『小公子』でいよいよ第十編に達しました。これは彼の有名なる良小説『リツトルロード、フオントルロイ』の縮譯であります。故若松女史の『小公子』は、いかにも名譯であります。家庭の讀み物、少年少女諸子の讀み物としては、長い原作を巧みに縮めて、而かも極めて面白く解り易く出来て居る。本書の方が適當であらうと信じます。

(定價金貳拾錢 郵稅四錢)

庫文俗通

(第一編) <sup>バニヤンの</sup>天路歷程  
BUNYAN'S PILGRIM'S PROGRESS  
(第二編) <sup>ストウスの夫人の</sup>奴隸  
STOWES JUNGLE FOWL'S CABIN  
(第三編) <sup>聖書の</sup>物語語  
THE BIBLE STORIES  
(第四編) <sup>アンデルセンの</sup>赤靴物語語  
ANDERSEN'S FAIRY TALES  
(第五編) <sup>トルストイの</sup>人巡禮  
TOLSTOY'S TWO PILGRIMS

(第六編) <sup>ロビンソンの</sup> Robinson Crusoe  
(第七編) <sup>イソップの</sup> 物語語  
AESOP'S FABLES  
(第八編) <sup>シェークスピアの</sup> 物語語  
TALES FROM SHAKESPEARE  
(第九編) <sup>グリムのお伽噺</sup>  
GRIMM'S FAIRY TALES  
各巻繪入 一編フリガナつき  
各册定價金貳拾錢 郵稅四錢宛

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢東 元版出

第三版

# フランダーズの犬

ウダイ原著・高日柿軒譯

萬朝報批評

本書は數月前伊太利に窮死し、僅かに其の一忠婢と數頭の犬猫とによりて哀悼の誠を致されたる薄倅不遇の閨秀作家ウイダ(本名ルイス・デ・ラ・レミイ)女史が一代の傑作にして現下歐米の各新聞雑誌は、筆を揃へて之を激賞し、世界最良圖書百卷の一に數ふべきを云ふものあり。實に世の貧しき者弱き者に對して涙がれたる作者の同情熱誠は、滾々として紙上に漲ぐ、殊に忠犬が孱弱き主人公を慕ひ、自ら安樂を捨て、死地に就くのあたりは、試に五六の少年少女をして讀ましめたるに、よく一人の泣かざるものあることなし。譯文また流麗暢達。動物愛護の情を養はしむる上に多大の貢獻あるべきを信じて疑はず。是れひとり少年少女の健全なる家庭讀本として推薦すべきのみならず、又贈物用として甚だ妙なる可し。

定價金貳拾五錢・郵稅四錢

東京東區東橋口鴨町上三番地 內外出版協會 版元

# 愛ちやんの夢物語

丸山 薄夜 譯述

▲此書は有名なレウイス、キアロルと云ふ人の筆に成れる「アリス、アドヴェンチュアス、イン、ワンダーランド」を譯したものです。無邪氣な一少女の夢物語。至極滑稽なるうちに一種の教訓を秘めたお伽噺で、家庭の讀物としては無上の良著である。……(新 公 論) 庭の讀物として面白さうな本である。一少女の夢物語を集めたものである。滑稽の中に教訓あり。無邪氣にして奇抜。一讀を勧む。……(明治の家庭) 無邪氣なる一少女の夢物語。滑稽の中自ら教訓あり。少女のお伽噺としては以て来いなり。……(國民新聞)

定價四錢 郵稅四錢

(刊新)

# 動物の同盟罷業

丸山 薄夜 譯述

「婦女新聞」曰く、原書は米國人道教育會の懸賞小説にて、馬や猫や犬や鶴や小鳥共などが、農夫の虐待に堪へ兼ねて同盟罷業を企て、馬は假病をつかつて畑にも出ず、鳥は害蟲を捉らす、犬はムグラを捕らぬと云ふ様にひどく農夫を困らせたので、さしもの農夫も我を折つて、それからは動物を愛護するやうになり、圓滿なる家庭を作るに至つたと云ふ筋で、實に面白く、人類に下等動物に對する愛護の念を起させる。いたづら小僧の多い日本の家庭には殊に必要な本だと思ふ。

定價四錢 郵稅四錢

(刊新)

東京東區東橋口鴨町上三番地 內外出版協會 版元



シニルドン原著 宮崎八百吉譯

# 舊約聖書物語

定價 金六拾錢  
郵稅 六錢

歐洲の文學を修むる者は必ず先づ聖書に舊約全書の話を一通り知らざる可らず、否うされば歐洲文學の本源を窺ふを得ず。其中の物語は單に宗教の一點に止らず、人事百般の經驗と人情の機微を穿ち居れば、其深遠なる寓意と天來の教訓は、修身處世の秘訣を悟るに益あり、虚心平氣に考ふれば、西洋の文學にこれほど興味あるものはあらず。本書は元來聖書のために書きたれば別段宗教臭くもなく、何人が讀みたりとて毛嫌ひするの患なし。其譯文に至てはさすがに明治の一文士として、また昔ては監牧の職に就きし經驗ある人の事なれば、能く原文を咀嚼し、流麗の筆致體格を飽かしめざる概あり。四六列三百二十ページの大部なり。……(中外英字新聞)

大屋徳城 編著

# 通俗佛典物語

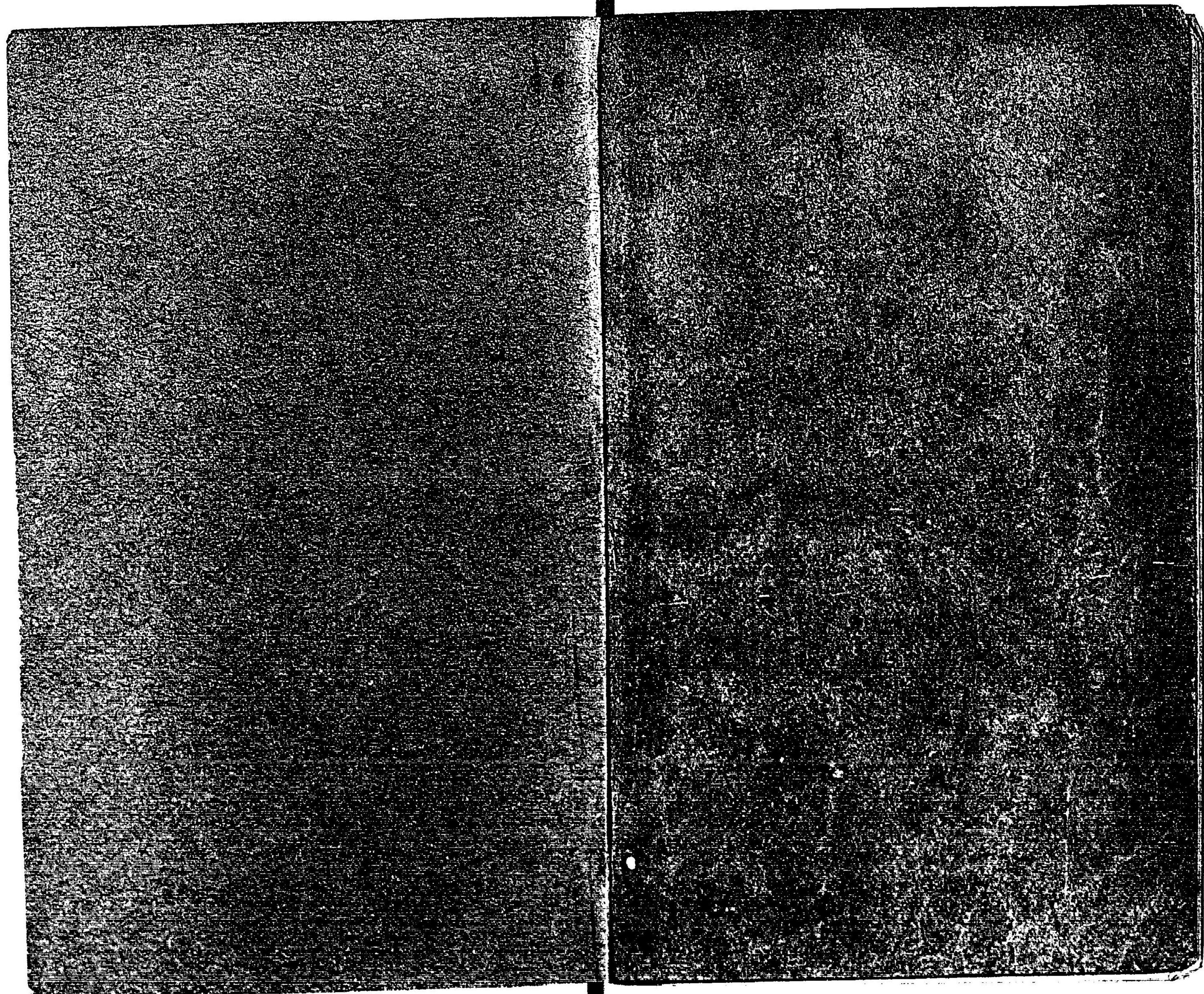
全三册 完  
定價 金九拾錢  
郵稅 八錢

著者雖に世界三聖傳の中に「釋迦」を著すや、當代の快者として讀書界に歡迎せられ、噴々たる高聲の聲今に四方に聞ゆ。本書は著者が、興味に富みて而も善良なる讀み物の缺乏を感じず、家庭と、未だ多く佛典の内容を知らざる讀書家との爲めに著せる新著にして、材を浩瀚なる佛典の中に取り、豊富なる趣味の間に拘めども盡きぬ聖訓の含まれたる物語を、やさしく美しき言葉に書き和らぐ。是蓋し我國未だ曾て有らざる所の試みにして、讀者は是に依りていと清新なる感興を得ると共に、兼んで聖教の妙旨を味ふことを得べく、附録「佛陀及び佛陀の教」は釋迦の略傳にして又佛教の概説なり

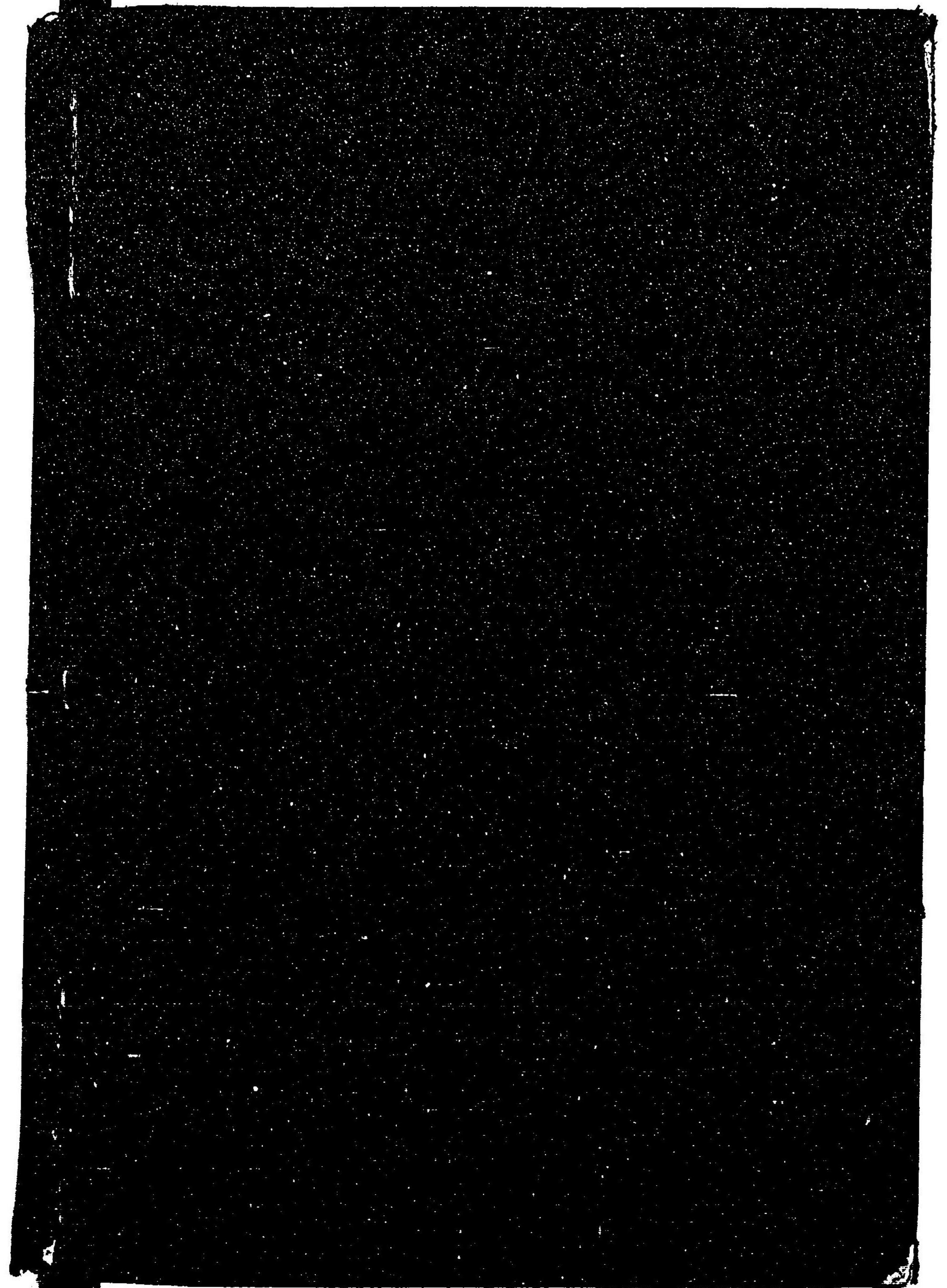
出版元 東京 橋本 町 上 三 丁目 二 番 五 十 五 地 番 五 十 五 内 外 出 版 協 會

1525
144





326
144





020495-000-0

325-144

基督教の研究

井口 弥寿男 / 著

M44

ABI-0306

